

湖南中部流域下水道管理用道路
関連遺跡発掘調査報告書 I

—横江遺跡・大門遺跡—

1978

滋賀県教育委員会
賀県文化財保護協会

は　し　が　き

わが国、最古・最大の淡水湖「琵琶湖」は、水生植物や魚類の宝庫であるばかりではなく、近畿の水堺として、近年ますますその重要性を増している。ところが、一方では、湖水の汚染もすすみ、その危機が叫ばれ続いている。このような中で、序々にではあるが、下水道工事の進められていることは、まことに喜ばしいことである。本調査もそれに先立って実施されたものであって、予想以上の成果が得られた。嚴冬の中、調査・報告に協力くださった関係者各位に、改めてお礼を申し述べたい。

昭和53年3月

滋賀県教育委員会
文化財保護課長

藤　沢　守　雄

例　　言

1. 本書は、守山市横江町、大門町に所在する、湖南中部流域下水道管理用道路関連遺跡（横江遺跡、大門遺跡）についての発掘調査報告書である。
2. 本調査は滋賀県土木部下水道建設課の依頼にもとづき、滋賀県教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会の協力を得て実施した。
3. 現地調査および報告書作成には、滋賀県教育委員会事務局文化部文化財保護課技師大橋信弥が担当し指導した。
4. 現地調査、整理については、別所健二、谷口徹両氏の協力を得たほか、中西和多隆、水野敏昭、尾谷孝、三宅治、美濃部力、大崎義彦、井入勉、谷口考司、山本芳正、国松千夏、大橋美和子、中村明、福井昭彦、出湯栄治、林高広の諸君が参加した。
5. 本書の執筆は、主として、大橋、谷口（IV-2）があたり、遺物写真については、寿福滋氏を煩した。記して謝意を表したい。

湖南中部流域下水道管理用道路
関連遺跡発掘調査報告書 I
—横江遺跡・大門遺跡—

目 次

は し が き

例 言

I.はじめに.....	1
II.調査の経過.....	2
III.遺構.....	4
1.壠立柱建物.....	4
2.溝.....	7
3.井戸.....	7
4.土塁.....	8
5.小結	
(1)弥生後期の遺構.....	9
(2)鎌倉・室町期の遺構.....	9
IV.遺物.....	10
1.土器.....	10
2.木器.....	12
3.小結	
(1)〈T-8〉北側落ち込み出土の弥生土器.....	12
(2)七輪器・黒色土器の年代観.....	14
V.まとめ.....	16
出土遺物観察表.....	18

図 版 目 次

- P L. 1. 遺構 1. <T-1> 全景(南より) 2. <T-2> 全景(南より)
- P L. 2. 遺構 1. <T-3> 全景(南より) 2. <T-4> 全景(南より)
- P L. 3. 遺構 1. <T-5> 全景(西より) 2. <T-6> 全景(北より)
- P L. 4. 遺構 1. <T-7> 全景(南より) 2. <T-8> 全景(南より)
- P L. 5. 遺構 1. SB1近景(東より) 2. SB2近景(南より)
- P L. 6. 遺構 1. SB3近景(南より) 2. SB6近景(南より)
- P L. 7. 遺構 1. SB7~SB9近景(南より) 2. SE2近景(南より)
- P L. 8. 遺構 1. SE1近景(南より) 2. SK2近景(東より)
- P L. 9. 遺構 1. <T-8> 北側落ち込み近景(南より) 2. 柱穴近景(南より)
- P L. 10. 出土遺物 土師器、須恵器、黒色土器
- P L. 11. 出土遺物 土師器、黒色土器、須恵器、弥生土器、木器
- P L. 12. 出土遺物 土師器、黒色土器、須恵器(B 001~B 043)
- P L. 13. 出土遺物 黒色土器、土師器、須恵器(B 044~C 071)
- P L. 14. 出土遺物 須恵器、黒色土器、弥生土器(C 072~E 095)
- P L. 15. 出土遺物 弥生土器(E 096~E 123)
- P L. 16. 出土遺物 弥生土器(E 124~E 154)
- P L. 17. 出土遺物 弥生土器、土師器、黒色土器、須恵器(E 144~A 175)
- P L. 18. <T-1> 平面実測図
- P L. 19. <T-2> 平面実測図
- P L. 20. <T-4> 平面実測図

P L. 21. <T-5> 平面実測図

P L. 22. <T-6> 平面実測図

P L. 23. トレンチ断面実測図

P L. 24. トレンチ断面実測図

P L. 25. トレンチ断面実測図

P L. 26. S B 1 (上) S B 3 (下) 平面実測図

P L. 27. S B 2 (上) S B 7 (下) 平面実測図

P L. 28. S B 6 (上) S B 8 (下) 平面実測図

P L. 29. S B 5 (上) S B 9 (下) 平面実測図

P L. 30. 出土遺物実測図 (B 001~B 038)

P L. 31. 出土遺物実測図 (B 039~B 073)

P L. 32. 出土遺物実測図 (E 074~E 098)

P L. 33. 出土遺物実測図 (E 096~E 121)

P L. 34. 出土遺物実測図 (E 122~E 151)

P L. 35. 出土遺物実測図 (E 152~A 175)

挿 図 目 次

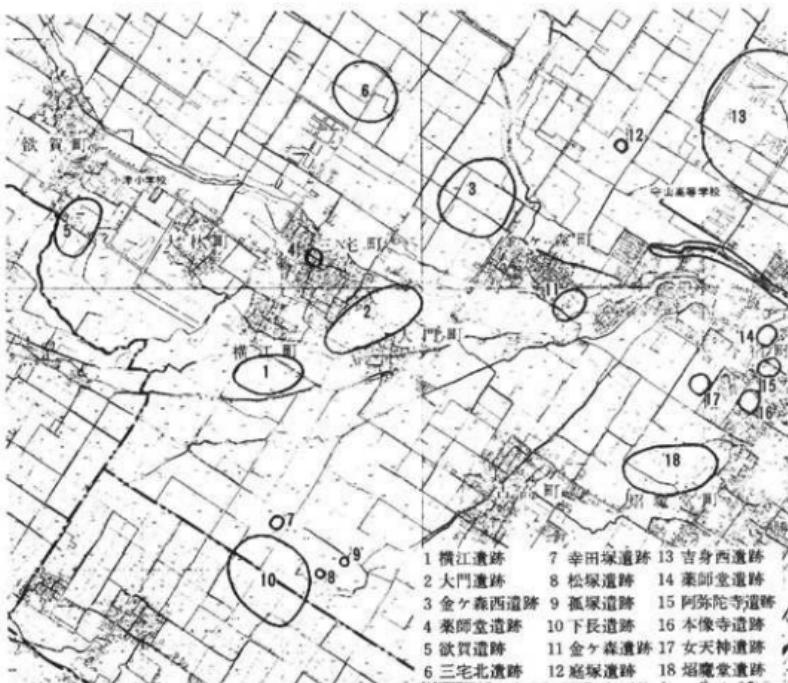
第1図	遺跡位置図	1
第2図	トレンチ設定図(1)	2
第3図	トレンチ設定図(2)	3
第4図	S B 4 平面実測図	4
第5図	〈T-3〉平面実測図	5
第6図	〈T-7〉平面実測図	6
第7図	〈T-8〉平面実測図	7
第8図	S E 2 平面実測図	8
第9図	S E 1 平面・断面実測図	8
第10図	S K 2 平面・断面実測図	9
第11図	〈T-8〉北側落ち込み出土木器実測図	15

I はじめに

本報告書は、県土木部下水道建設課が計画実施する湖南中部流域下水道建設工事に先立って実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を収録したものである。本冊には、昭和52年度に調査完了した横江遺跡・大門遺跡についての報告をおさめ、調査が昭和52・53の両年度にわたった金ヶ森西遺跡については次冊に収めることとした。

調査対象となった横江遺跡・大門遺跡の所在する守山市横江・大門町は、守山市と栗東町、草津市（旧野洲郡と栗太郡）の境界を流れる「境川」の自然堤防上に立地し、從来より周辺一帯に、古墳～鎌倉期の遺物の散布が周知されるところであった。^(註1) 言うまでもなく、上述の「境川」は古代野洲川の本流と言われるように、本地域周辺には從来より築高地上に点々と、各時代の集落跡の分布が知られており、これらの遺跡もそれらの一部に他ならない。

調査は工事が貫入工法をとるため、遺構確認に重点を置き、出来るだけ掘り下げは控えた。そして、掘り下げた部分については砂を充填して保存にそなえた。

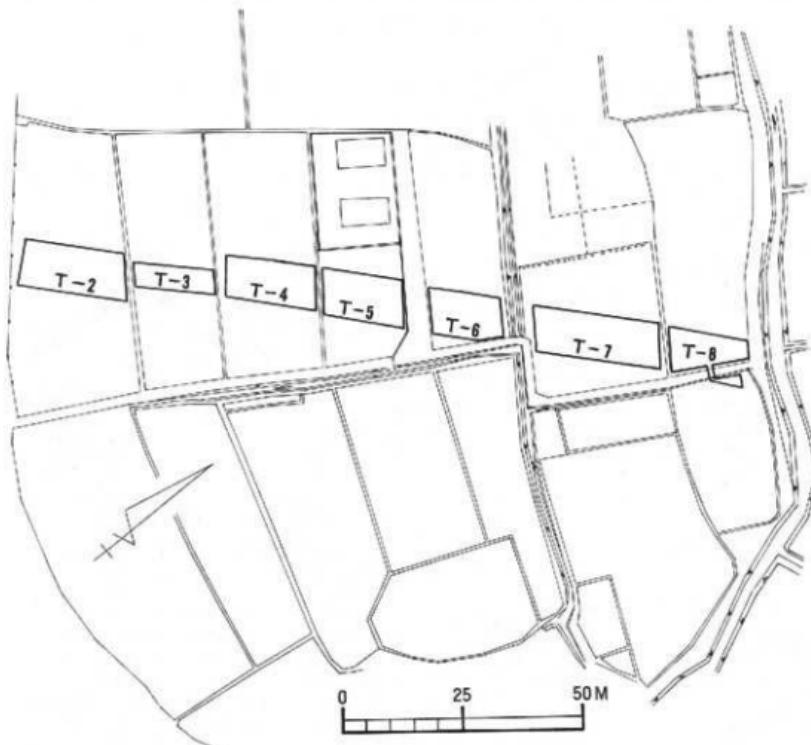


第1図 遺跡位置図

II 調査の経過

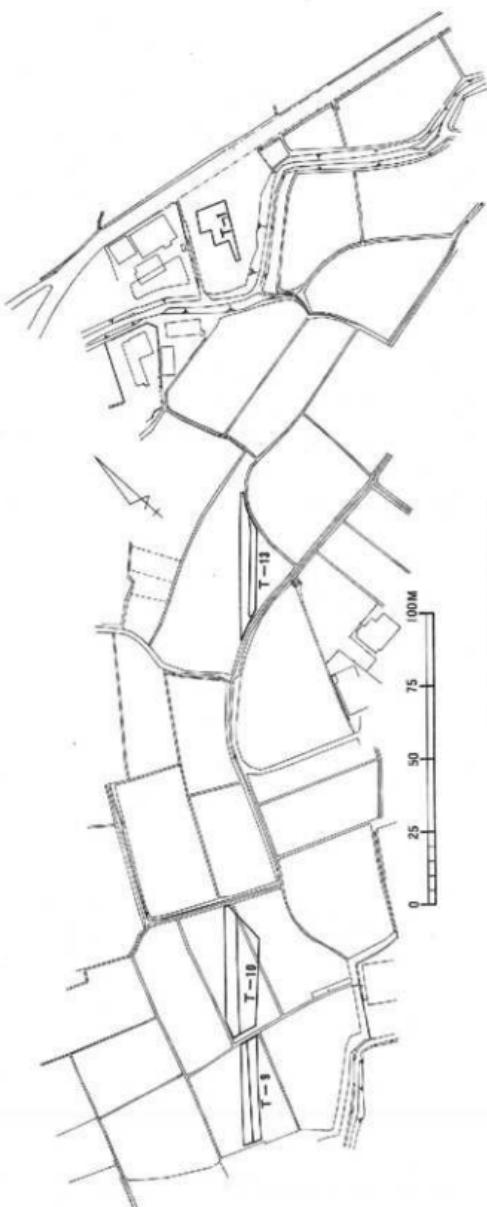
当調査は、昭和53年1月20日より、同年3月31日までの、およそ2ヶ月半を要して実施した。当初、土地所有者の都合で、大門遺跡最北端の県有地の調査よりはじめ〈T-1〉、次いで横江遺跡南端より、順次北に向かって工事敷地内の調査をすすめた〈T-2～T-13〉。トレンチは所有者の都合もあり、水田1枚単位に幅10mを基本に設定し、鉄板をはかせたバックボウにより耕土・床土を振り分け、遺構面まで掘り下げた。

〈T-1〉はすでに宅地化されており、約1m余を掘削して、旧水田上面に達し、遺構は、旧耕土・床土直下において検出された。発見された遺構は、掘立柱建物1棟(SB1)、溝1条(SD1)、土塙1基(SK1)、ピット多数である。なお、トレンチ中央より南半は後世の、「山賀川」の掘削・補修で大きく擾乱されていた。



第2図 トレンチ設定図 (1)

図3 図
レント
メント
定図 (2)



〈T-2〉は調査区最南端に位置し、レベルは〈T-3〉より約80cm余低い、耕土・床土（約30cm）を掘削すると、黄灰褐色粘質土よりなる地山が露見し、多数のピットとともに暗渠排水用の竹円筒が検出された。遺構としては、掘立柱建物1棟（SB2）、井戸2基（SE1・SE2）、土塙1基（SK2）、およびピット多数であった。

〈T-3〉は〈T-2〉に北接し、小麦がまかれていたため東半のみを掘り下げた。掘立柱建物2棟（SB3・SB4）が検出された。

〈T-4〉は層序が〈T-2〉・〈T-3〉とはほぼ同様で、黄褐色粘質土の地山に多数のピットが掘り込まれている。遺構としてまとまるのは掘立柱建物2棟（SB5・SB6）であった。

〈T-5〉は霜のためやや調査がおくれたので遺構上面をやや掘削して再検出し掘り下げた。検出された遺構は、掘立柱建物3棟（SB7・SB8・SB9）、ピット多数であった。

〈T-6〉は里道をはさんで〈T-5〉に北接する。道路がカーブするため、やや変形したトレンチである。北側に灰褐色砂質土の落ち込みがあり、遺物を包含する。西側に若干のピットが検出された。

〈T-7〉は水路をはさんで

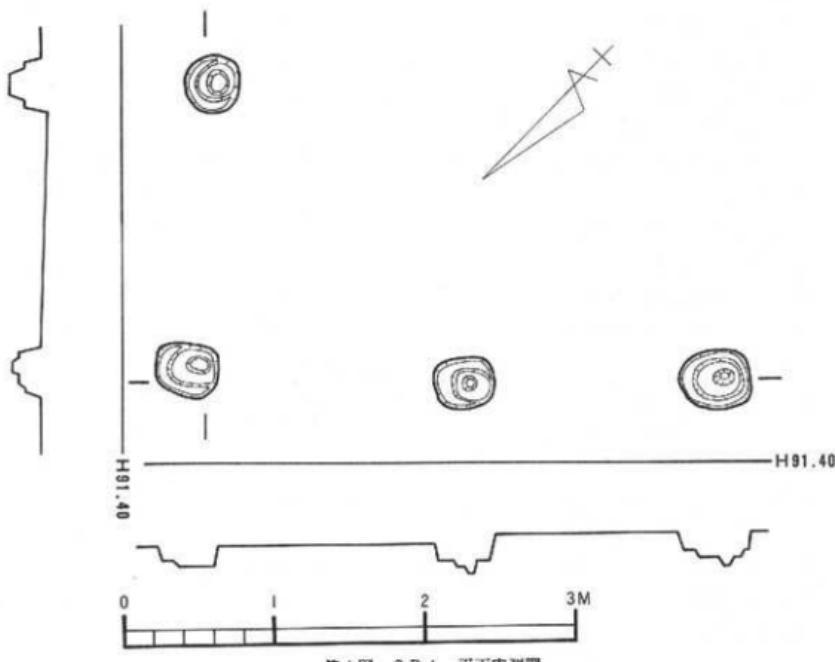
〈T-6〉の北に設定したもので、若干のピットが検出されただけでまとまるものはなかった。
〈T-8〉は「境川」の南に設定したトレーナーで、北側に弥生後期の落ち込みが広がり(S D2・S D3)、南に若干のピットと土塙(S K3)が検出された。

〈T-9〉～〈T-13〉は「境川」と「山賀川」に挟まれた部分で大門遺跡の中心部と考えられていた。
しかし一部で深堀りを行なったところ耕土・床土の直下に灰褐色粘質土・黒灰褐色粘質土の遺物
包含層がみとめられるだけであり、その下の灰色粘質土は無遺物で遺構の掘り込みはなかった。

III 遺構

上述のとおり、今回の調査で遺構の検出をみたのは〈T-1〉～〈T-8〉の各トレーナーで、掘立柱建物9棟、井戸2基、土塙3基、落ち込み2ヶ所、溝3条等、大部分が横江遺跡に含まれるものであり、
大門遺跡の中心部と考えられた〈T-9〉～〈T-13〉では遺構は検出されなかった。次に各遺構の概略を述べたい。

1. 掘立柱建物　掘立柱建物で一応まとまるものは9棟であったが、調査区域が幅10mと狭



第4図 S B 4 平面実測図

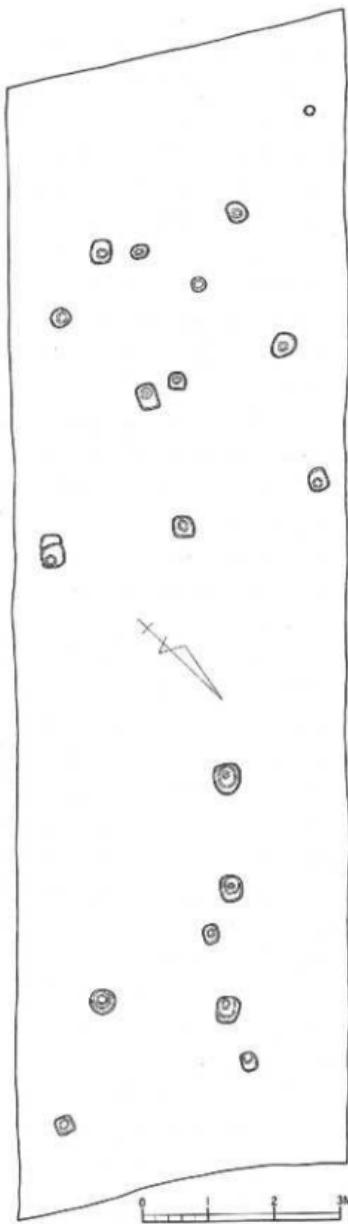
小であったため、未完掘のものが多く、総数はかなりの数にのぼると思われる。遺構は上半が後世の耕作等で削平をうけており、耕土・床土直下の、黄褐色粘質土を切り込んだ状態で検出をみた。N-33°Eの方位をもつものと、N-42°Eのものがあって、柱穴の埋め土や出土遺物から若干の時期差はみとめられるが、おおよそ鎌倉時代前半～室町時代初頭におさまるとと思われる。

〈SB 1〉南北三間×東西二間の南北棟と考えられる。南西隅の柱穴が後世の搅乱により消失しているほか、桁行（東側）の一柱穴が未検出であるが、一応上記のように推定しておく。柱間は桁行で2.4m、梁間で2.4mをはかり、南半の中央に一柱穴がみとめられ、間仕切りの可能性も考えられる。柱穴、掘方は20cm、40cmを一般形としており、小規模で堀方は隅丸方形を呈す。建物内に土塙が1基（SK 1）みとめられるが、相関連するか明らかでない。

〈SB 2〉南北一間×東西一間で四面に廻がつくと推定される南北棟である。

削平が激しく、柱穴の残存は少ない。掘方は、一辺40cm、柱穴も径20cm前後のものが多い。本建物の西南辺に一部重複して井戸が2基あり、相関連するものと考えられる。柱間は桁行で3.2m、梁間で2.3mをはかり、柱穴、堀方より若干の土器が出土している。なお、一回の建替えの痕跡がある。

〈SB 3〉SB 2の北側15mに所在する、南北二間×東西二間で純柱の南北棟である。堀方は本遺跡ではやや大きく40cm前後をはかり、柱穴も25~30cmをはかる。柱間は桁行で2.1m、梁間で2.1mをはかり、柱穴・堀方よりかなりの遺物が出土し、本建物の年代を考える上で注目される。



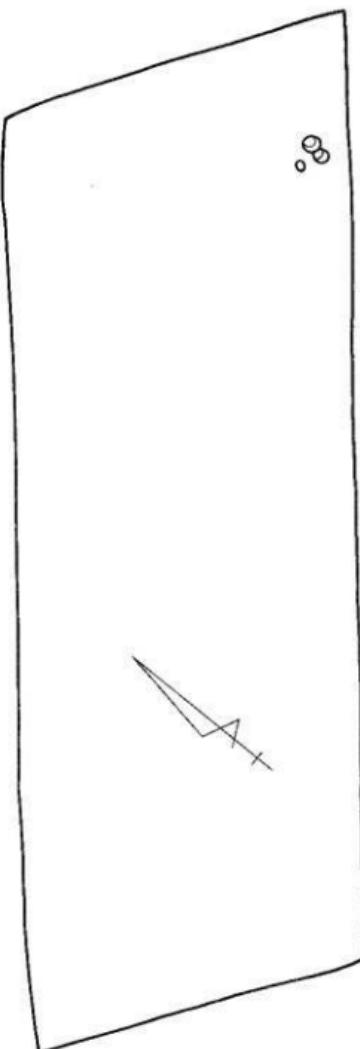
第5図 〈T-3〉平面実測図

〈SB 4〉暗渠排水等、後世の削平で一部未検出であるが、一応東西二間以上×南北二間の東西棟で、柱間は桁行2.1m、梁間で1.8mをはかり、一辺50cmの大形の壠方を有するものもあるが、柱穴はいづれも20cm前後をはかる。建物の方位はSB 1～SB 3と若干異なり、N-42°Wをさし、柱穴内の埋め土もSB 3と明確に異なり、灰褐色粘質土を充填する。出土遺物からは今一つ明確でないが、やや後出するものか。

〈SB 5〉全体は明らかでないが、南北四間×東西三間の南北棟と考えられる。桁行の柱間は中央でやや長く、四面廊となる可能性もある。柱間は桁行で2.1cm、梁間で3.0cmをはかり、壠方一辺30cm、柱穴径20cmの小規模な建物である。方位はSB 2等に等しい。

〈SB 6〉SB 5から数メートル北に所在する、東西二間×南北一間以上のおそらく南北棟となるものである。南側に一間分の廊状のものがつくようで、小ピットが検されている。柱間は桁行で1.5cm、梁間で2.1cmをはかり、壠方は一辺40cm前後の大きいものもある。柱穴は径20～30cmをはかる。大部分が調査外のため、全様は不明。方位、埋め土はSB 4と一致し、やや時期の下るものと思われる。

〈SB 7〉SB 8、SB 9と重複して所在する、東西二間×南北三間、南・西の二面廊をもつ南北棟である。柱間は桁行で2.1m、梁間で2.1mをはかり、壠方は一辺30cm、柱穴径20cmでやや小型と言える。方位はSB 2等と同じく、N-33°Wで建替えはみとめられない。その規模からして、建物群の中心的なものであろう。



第6図 〈T-7〉平面実測図

柱穴の切り合いからSB 9より後出することが知られる。

〈SB 8〉 SB 7の北に重複して所在する、東西二間×南北二間の純柱の南北棟で、暗渠等により一部破壊されているが、方位はSB 4・SB 6等と共通である。柱間は桁行・梁間とも2.1cmをはかり、堤方、柱穴は30cm、20cmを一般形とする。SB 3と同様倉庫と推定される。

〈SB 9〉 SB 7・SB 8と重複して所在する、東西一間以上×南北四間と考えられる南北棟である。東半の中心が未調査のため詳細は不明であるが、検出部分は廂の可能性が強い。柱間は桁行で2.1m、梁間で2.1mをはかり、一辺30cm、径15cmと小規模な堤方、柱穴をもつ。なお柱穴の切り合いより、SB 7より先行することが知られる。

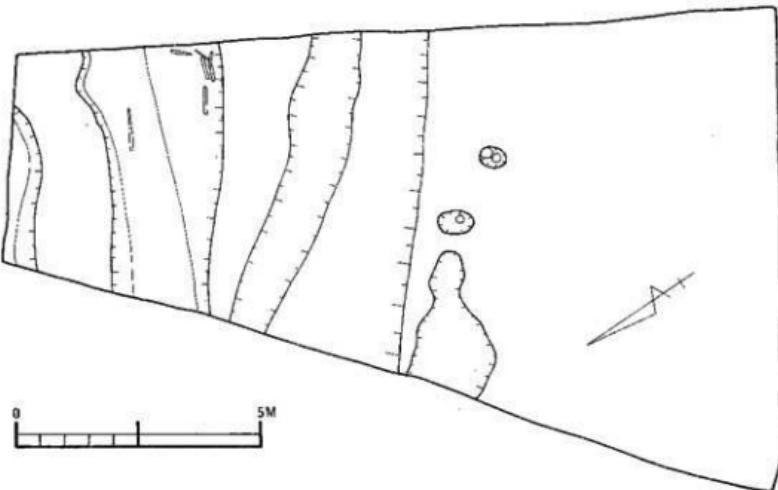
2. 溝 後世の削平が大きいためか、溝の残存はきわめて悪い。〈T-1〉に1条、〈T-8〉の落ち込み内に2条の計3条のみであった。

〈SD 1〉 SB 1に重複して北西から南東へ流れる幅0.4m、深さ20cmの小さな溝である。黄灰褐色粘質土の地山を切り込んで、淡灰褐色砂質土を充填する。遺物は全くなく、SB 1に関連する可能性も考えられるが明らかでない。

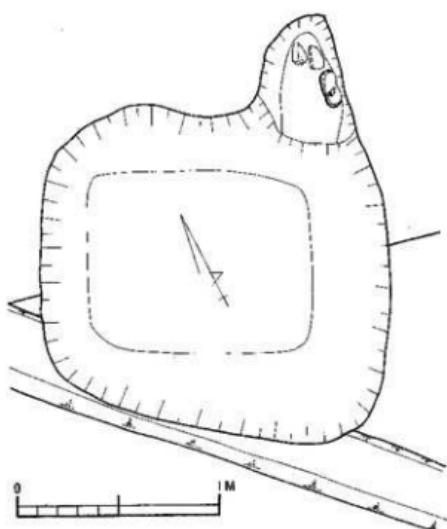
〈SD 2〉「境川」の南岸の落ちぎわに掘り込まれた2条の溝のうち南側に位置するもので、幅1.2m、深さ80cmをはかり、やや蛇行しつつ北流する。落ち込み全体からは、大量の後期弥生土器が出土しており、弥生後期に形成されたものと考えられる。

〈SD 3〉 SD 2の北を東西流する、幅2.4m、深さ100cmの溝である。SD 2と同じく後期弥生土器の出土が知られるほか、木製品が多数出土した。

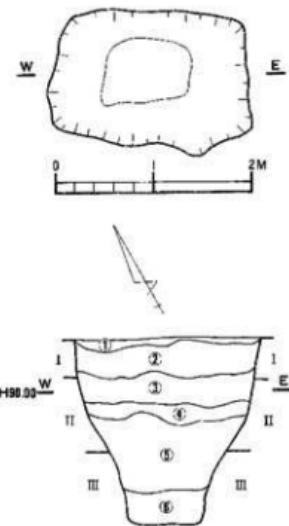
3. 井戸 〈T-2〉で2基の井戸状造構が検出されている。いずれも素掘りの構造をもち、



第7図 〈T-8〉平面実測図



第8図 SE 2平面実測図



第9図 SE 1平面・断面実測図

上述の建物に関連するものである。

〈SE 1〉 SE 2 の北に接して所在する、長辺2.0m、短辺1.4m、深さ1.9mの素掘りの井戸と考えられる。①灰褐色粘質土、②黄灰褐色粘土、③黒褐色粘土、④暗黄灰褐色粘土、⑤青灰色粘土と黒灰色粘土の互層、⑥黒灰色粘土の6層よりなり、⑥層に腐植した植物の堆積がみられた。出土土器より、鎌倉前期の所産と考えられる。

〈SE 2〉 トレンチの南端で検出された、長辺2.0m、短辺1.7m、深さ2.4mをはかる素掘りの井戸である。現況で地山Iの黄灰褐色土層、地山IIの茶褐色粘土層、地山IIIの灰褐色粘土層を掘り抜き築造され、埋め土は、①黒灰褐色粘質土、②黒色泥土、③灰黑色泥土の3層よりなる。このうち②層に土器、木器が多く、③層には若干の土器片と広葉樹の落葉が数条にわたってうすく堆積していた。出土土器より、およそ鎌倉後期に廃絶したことが判明する。

4. 土塙 〈T-1〉、〈T-2〉、〈T-8〉に各一基の土塙が検出されている。いづれも上部を削平されており、残りの悪いものである。出土遺物より、建物などと並行することが知られている。

〈SK 1〉 SB 1 に重複して所在する、長辺1.5m、短辺1.3m、深さ0.2mの隅丸長方形の浅い土塙である。柱穴と同じく黄灰褐色の地山を掘り込み、淡黒灰褐色の埋め土を充填する。SB 1 の屋内土塙の可能性もあるが、断定は控えたい。

〈SK 2〉 SB 2 の西に所在する、長辺 1.7m、短辺 0.7m、深さ 0.2m の浅い不整椭円形の土塙である。埋め土は柱穴とほぼ同様で淡黒灰褐色粘質土からなり、出土遺物より、SB 2 に併行することが知られる。

〈SK 3〉 〈T-8〉の北側落ち込みに南接して所在する、長辺 2.5m、短辺 1.5m、深さ 0.4m の浅い不整形の土塙である。その性格は明らかでないが、落ち込みとほぼ同じ時期の遺物が検出され、何らかの水辺の祭祀を示すものか。

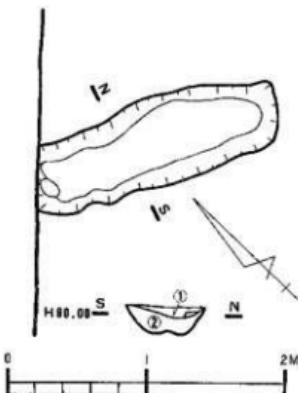
5. 小結

以上、検出された遺構の概略を述べた。検出された遺構は、その時期により大きく二つのグループに分けることができる。すなわち、鎌倉時代～室町時代初に中心的な年代があると思われる掘立柱建物、井戸、土塙などと、弥生後期を中心とする〈T-8〉北落ち込みの 2 グループである。

(1) 弥生後期の遺構 この時期の遺構は上述の通り、明確なものはなく、わずかに〈T-8〉北側落ち込みおよび落ち込み内の SD 2・SD 3、落ち込みに隣接する SK 3 が該当するのみである。後述するように、これらの遺構内より出土したのは弥生後期、中でも中葉（上小版期）を中心とするもので、周辺部に当該時期の集落が埋没しているのは確実と言える。又、上にも述べたように落ち込みの南に所在する SK 3 は、水辺における何らかの「まつり」を示すものと見えよう。本遺跡（横江遺跡）に隣接する金ヶ森西遺跡では、かつて水田中より土師器壺に入った小型仿製殊文銅鏡が出土し、昭和 51 年度に実施した調査では、旧河道の肩部で完形土器とともに有孔円板 4 枚が検出されており、興味深いものがあった。^{〔註 3〕}

(2) 鎌倉・室町期の遺構 この時期と考えられるものは、掘立柱建物 9 棟、井戸 2 基、土塙 2 基、溝 1 条である。このうち SB 1、SK 1、SD 1 は大門遺跡、或は金ヶ森西遺跡に含まれるものであるが、時期・性格等、大きく違わないのでまとめて検討しておきたい。

遺構の中心をなす建物跡は、上部を削平されているとはいはずれも小規模で柱穴も大きいものはない。又、その分布もトレンチ調査という限界はあるにしろ、集中性はなく、中世における村落の一形態を示していると考える。建物は柱穴の切り合い、或は埋め土の差異・方位のちがいなどより、大きく 2 グループに分けられる。一つは、SB 1、SB 2、SB 3、SB 5、SB 7、SB 9 などで、方位を条里の方位に近い N-33°E にとり、柱穴の埋め土は黒灰褐色粘質土である。柱穴内の出土遺物はおよそ鎌倉時代前半の年代を示している。今一つは、SB 4、SB 6、SB 8 などとなり、方位は N-42°W で、条里に規制されず、柱穴の埋め土も灰褐色粘質土と、第 1 グループと明確に区別される。柱穴内の出土遺物はおよそ鎌倉時代後半の年代を示すものである。以上のように、建物の変遷は第 1 グループより



第 10 図 SK 2 平面・断面実測図

第2グループへ移ったと考えられるが、両グループの並存する〈T-3〉、〈T-4〉、〈T-5〉では両者を1セットとして、それぞれ空地をはさんで所在しており、一応単位ごとの建て替えが予想される。このことは〈T-2〉に所在する2基の井戸のあり方からも若干補足できる。すなわち、2基の井戸のうち、SE2はSB2の南端に接して築造され、出土した遺物もSB2を含む第1グループの柱穴内より出土したものと同じで、ほぼ並存したと考えられるのに対し、SE1はSB2の柱穴を一部壊して築造されており、出土遺物もほぼ第2グループのものに並行するのである。したがって以上の諸点から、鎌倉後半～室町初頭のある時点に一時的に廃絶し、更めて同じ場所に再建されたことが、一応想定されると思われる。

IV 遺 物

本遺跡の出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶器・輸入陶磁など多数にのぼるが、このうち〈T-8〉北側落ち込みより出土した弥生土器が過半を占めており、他は〈T-1〉～〈T-7〉の柱穴・井戸・土塙および包含層より出土したものである。なお、〈T-8〉北側落ち込みからは、盤と思われる木製品をはじめ、若干の自然木の出土が知られる。

1. 土器

(弥生土器)

いづれも〈T-8〉北側落ち込みより出土したもので、器種としては、壺形土器・甕形土器・高杯・器台・手焙形土器などがある。

まず壺は、出土数は少ないが、その形態より一応A～Fの7タイプに分類される。Aとしたのは、畿内Ⅳ様式の系譜を引くもので、内湾気味に立ち上がる口縁外面に数条の凹線をめぐらすもので、Bとしたのは、大きく外反する頸部に「S字状」に屈曲した口縁のつくもの、C・Dは、いわゆる長頸壺の範疇に属するもので、Cは細頸、Dは頸部がやや外湾するものである。Eは口縁がラッパ状に開くもの、Fは短く外反する口縁をもつものである。なお壺底部には、やや上げ底気味にシャープに突出するもの、平底のもの、上げ底のもの、安定した平底のものなどが認められる。いづれも後期弥生土器に類似のあるものである。(註6)

次に甕も、その形態よりA～Cの三つのタイプに分類される。Aタイプはいわゆる「受口状口縁」を有するもので、甕の大半を占める。Aタイプは口縁の形態より、さらにI～VIの6種に分類される。A-Iは立ち上がった口縁端部を平坦におさめるもの、A-IIは口縁端部をわずかに引き出し平坦におさめるもの、A-IIIは端部外面が凹状を呈するもの、A-IVは端部上面が凹状を呈するもの、A-Vは端部を大きく引き出し、やや外反させたもの、A-VIは立ち上がり部が内傾し、端部を外反させたものである。Bタイプは「く」字に外反する口頸部をもつもの、Cタイプは「ハ」字に開く口縁をもつものである。甕底部には平底で両端の接地しないもの、上げ底気味のもの、平底のもの、底部中央に凹みをもつものなどがある。甕はいづれ

もハケ目調整を主体としており、タタキの痕跡は認められない。口縁部はナデで仕上げるものが多い。いずれも後期弥生土器に含まれるものである。

高杯にもA・Bの2種があり、杯底部がやや内湾し、口縁部が大きく外反するAタイプが大部分を占め、平底の杯底部をもち、口縁が直線的にのびるBタイプは1点のみであった。脚部の形態には、円錐形の大きなもの、短かく大きく開くもの、なだらかに開くものなどがある。いづれも、丁寧にヘラミガキを施してある。特にAタイプは後期弥生土器に典型的なものである。

器台は出土数が少いが、その形態よりA・Bの2種に分類される。Aは口唇部を肥厚させ、下方に拡張したもの、Bは端部を単に下方に拡張したものである。脚部も、大きく外反するもの、ゆるやかに開くもの、円柱状で幅の大きく開くもの、幅先端を上下に拡張するものなどが類別される。外面は丁寧にヘラミガキを施し、内面はハケ目調整後、一部をナデ調整している。これらも弥生後期に類例の多いものであろう。

ほかに手焙形土器1点の出土が知られる。蓋部と鉢部をともにつくり、突帯や刻目などで装飾したものである。最近この種の遺物の出土例はかなり増加し、出土形態などについて新しい知見が得られているが、県内においても、長浜市鴨田例を初見とし、湖西線関連遺跡、守山市服部遺跡、野洲町下縁子遺跡などで出土が知られる。
(注7)

〔土師器〕

各トレンチより、小皿・脚付皿・羽釜などがまんべんなく出土しているが、小皿が圧倒的に多い。小皿は形態によりA～Fの6種に分類されるが、いづれも粘土板を手づくねで成形し、一部口縁をナデにより調整している。Aは丸底で口縁の外反するもの、Bは丸底で口縁の内反するもの、Cは平底で体部がやや内湾し、口縁が大きく外反するもの、Dは平底で口縁が内反するもの、Eは丸底気味の浅い皿で、口縁端部を内側に折り曲げたもの、Fはやや異形手づくね品とした。これらは、Eが平安時代に遡ると考えられるほか、いづれも鎌倉～室町期に類例の認められるものである。

〔黒色土器〕

各トレンチより、いわゆるA類の碗が多数出土し、小皿の出土も若干知られる。碗は表面の剥離がかなりすんでいるが、久野部七ノ坪例のように、明白に土師器と考えられるものはなかった。一応久野部例にならってA～D、さらに後出するものとしてEタイプを設定したが、
(注8) A・Bタイプに属するものはほとんどなく、C・Dタイプ、Eタイプがほぼ半ばした。C・Dタイプは器台の低い浅碗で、体部が内湾し口縁端部の内反するものをC、外反するものをDとした。内面と外面の一部に粗いヘラミガキを施している。Eタイプは体部は直線的で、端部も内外反するものが少ない。内面に暗文を施し、口縁内側の沈線を省略したものもある。高台は退化の途上にあり、低い断面三角形を呈する。C・Dタイプは鎌倉前期に、Eタイプは鎌倉後半～室町期に類例の求められるものである。

〔須恵器〕

須恵器の土器も若干出土しており、杯・碗・鉢・壺・甕などの器種が知られる。一応、器形

・胎土などより東海産の可能性が強いが、年代等詳細は明らかでない。ただ、C O 19は猿投窓に類似品があり、およそ11世紀代のものと考えられる。

(注9)

〔施釉陶器〕

縁釉の出土はなく、灰釉の瓶・壺などの出土が知られる。東海産と考えられるが、出土数も少なく性格を明らかにしがたい。

〔輸入陶器〕

白磁が一点出土している。詳細は明らかでないが、大宰府出土資料では、11世紀中葉から12世紀初頭のものに類例がある。

(注10)

〔国産陶器〕

耕土層より甕・壺などの出土がみられるが、遺構に伴うものかどうか明らかでない。

2. 木器

〈T-8〉トレンチ東側で、南北に走る弥生時代後期の旧河道を検出した。旧河道内には、多量の土器片・自然木とともに若干の加工木が流入していた。ここでは、それら加工木の中で、比較的遺存の良好であった盤について考察を加えておきたい。

盤（第11図）は、現存長44.0cm、現存幅7.4cm、現存高3.6cm、底部厚さ1.5cmを計る。一部を遺存するのみで、その全様は定かではないが、短辺を弧状に作った長方形の盤であろう。内部をくり抜いて作っており、底部は比較的平坦に削り込み、ゆるやかな角度をなして斜面上方に口縁部がのびる。加工痕なしし使用痕の痕跡は確認できない。材質はヒノキであり、丸太を半截した横木を使用したものと推察される。

3. 小結

(1) 〈T-8〉北側落ち込み出土の弥生土器

前述のとおり、〈T-8〉北側落ち込みの旧河道からは一群の後期弥生土器の出土をみた。近江における後期弥生土器については、從来より良好な資料に恵まれず、湖北地方の様相が、一部明らかになっているだけであったが^(注11)、湖南地域では、近年あいついで野洲町久野部の2地点、大津市部屋ヶ谷等において比較的まとまった資料が検出され、その様相がやや明らかになってきた。そこで、まず本遺跡資料との比較検討を試みてみたい。

まず壺では、久野部七ノ坪例に若干の類品が認められる。すなわち、本遺跡で壺Bとした細い頸部に受口状の口縁を付したものは、七ノ坪で壺IIとされたものと、又、本遺跡で壺C・Dとした長頸壺が、同じく壺Iとされたものときわめて類似している。これに対し、久野部十ヶ坪例では壺の資料に恵まれず、やや頸部の長頸壺がみえるだけで、本遺跡例との比較は不可能である。一方部屋ヶ谷では、長頸壺は短頸化したものが若干認められるものの、短かく外反する口頸部をもつ、本遺跡で言えばFタイプのものが多くみられる。したがって、本遺跡例は久野部十ヶ坪例および部屋ヶ谷に先行するらしいこと、久野部七ノ坪にはほぼ並行することが推測される。

次に甕では、いずれも、「受口状口縁」のものが大半を占めているが、後述するように、この種の甕のあり方は、その盛行期である後期において多様なあり方を示すと思われる、形態等で先後を容易に決しがたいと思われる。ただ、一般的な傾向からみて、本遺跡例は久野部の2地点に並行ないし後出するものが多く、部屋ヶ谷例に後出例の多いことが指摘できる。すなわち、久野部の2地点のものは、頸部が大きく屈曲し、大半に斜刺突列点がめぐらされるのに対し、本遺跡例には刻目や沈線をめぐらすものがある一方、一部部屋ヶ谷では、口縁立ち上がりがやや外傾し無文のものがかなり認められるのである。

一方、単純な口縁を有する甕も、久野部2地点（甕C）および本遺跡（甕C）で若干認められるものの絶対数は少ない。これに対し部屋ヶ谷では全体の2分の1弱を占めるようであり、若干の様変りが見てとれる。すなわち、近江独自の受口状口縁甕に対し、畿内V様式に一般的な単純口縁甕の比率の変化は、両者の交流関係の消長を示すものとして興味深い。

次に高坏をみてみよう。本遺跡例（高坏A）は、久野部七ノ坪SD2下層例と、形態・手法等、全く類似している。これに対し、久野部十ヶ坪・部屋ヶ谷例は、坏部口縁がかなり外反し、脚部中央化がすんでいるところから、やや後出することが推定される。なお、本遺跡の高坏Bは、明らかに土師器と考えられるものである。

器台の場合、久野部2地点に良好な対比資料はなく、部屋ヶ谷例に類似するものが認められる。ただ胴部や裾部の形態は、本遺跡例に古い様相が認められると思われる。

以上、検討を加えたごとく、本遺跡出土の後期弥生土器は、久野部遺跡2地点のうち、七ノ坪地点例に類例が多く、それに並行ないし、やや後出し、十ヶ坪地点や部屋ヶ谷遺跡例にやや先行することが明らかになった。

そこで、次に畿内の後期弥生土器との比較により本遺跡の弥生土器の相対的年代を考えてみたい。畿内V様式の細分については、小林行雄・坪井清足・都出比呂志の諸氏によって、中河内の資料によって試案が提出され、西ノ辻I式→同E(D)式→北島池下層式という変遷が示^(注13)され、最近、丸山竜平氏・兼康保明氏は、西ノ辻E・D地点式に代置しうるものとして、調査の進んだ鬼塚・上小坂・馬場川の資料を加え、都出氏の指摘した上六万寺を含め、西ノ辻I→鬼塚→上小坂→馬場川→上六万寺→北島池という6段階に細分した。又、森田克行氏は、畿内各地の資料から、タキ技法の変遷を軸に、西ノ辻I→池上J2号井戸→安満A5-2方形周溝墓→田能6Y-2溝→唐古45号上層式→北島池の6型式に細分した。^(注14) そしてさらに、丸山竜平氏は、石野博信氏の試案を発展させ、文献により導き出される前後二回の倭国大乱を、西暦180年、260年前後に比定し、弥生中期末と後期末の二つの時期に集中する高地性集落をそれぞれ対応させることによって、中期→後期→古墳前期という変遷に、絶対年代を付与しようとされた。^(注15)

以上のような畿内V様式の細分に基づき、近年ようやく明らかになってきた。近江の後期弥生土器の変遷にも、若干の検討がなされつつある。まず、兼康保明氏は、久野部十ヶ坪の資料と中河内の資料との対比を試み、特に、その長頸壺・高坏の形態が、上小坂・馬場川期に類例の多いものとし、十ヶ坪例を後期中葉に、一応の相対年代を求められた。^(注16)

一方、上述のとおり、大津市高峯遺跡と部屋ヶ谷遺跡の資料にもとづき、弥生土器から土師器への変遷について、検討を加えた丸山竜平氏は、部屋ヶ谷遺跡の一括資料を、長頸壺の消滅（垂式化）、高坏の坏部の外反、脚部の中実化などから、中河内の馬場川期に並行するものとし、上述の觀点から、これに西暦 260 年代前後という絶対年代を付与された。そして同時に、久野部七ノ坪地点の資料を、中河内の鬼塚期に対比して、後期中葉のいわゆる「卑弥呼の時代」に該当されたのである。

又、久野部七ノ坪地点から S D 2 出土例を詳細に検討した別所建二氏は、S D 2 の資料を上・中・下の三層に細分し、やや混入のある中層を下層と一括して、上・下二層に分類した上で、それぞれ中河内の資料との対比を試み、主として受口状口縁甕・長頸壺・高坏の形態・手法から、上層式を「上小版」～「馬場川」の段階に、下層式を「鬼塚」～「上小版」の段階に位置づけた。^(注19)

以上のように、主として中河内の資料との対比によって、近江、わけても湖南地方の後期弥生土器の位置付けがなされ、それなりの妥当性をもつと考えるが、各論者が対比の基準とされる中河内における後期弥生土器の変遷については、一部疑問点が残る。すなわち後期初頭に西ノ辻 I 地点、終末に北島池を位置付け、その中間に鬼塚・上小版・馬場川・上六万寺の 4 小期を設定されるが、このうち変遷の比較的明確な長頸壺・高坏の資料などからして、鬼塚・上小版は、同時期ないし逆転するように思われる。すなわち、長頸壺では、鬼塚期のものが西ノ辻 I 地点式に近く、上小版のものが後出するようであるが、高坏は、明らかに上小版のものが古相を示し、西ノ辻 I 地点式に近い様相を呈しているのである。したがって、一応混入の可能性を考慮して鬼塚・上小版期は同一小期にとらえたほうがよいように考えられるのである。したがって、ここでは、畿内 V 様式を、西ノ辻 I → 上小版（鬼塚）→ 馬場川 → 上六万寺 → 北島池の 5 小期に分け、上述の対比を再検討しておきたい。部屋ヶ谷の資料は、一応、馬場川期に位置付けられるが、高坏・甕の形態などからそのうちでも新しい様相を示していると思われる。そして、久野部七ノ坪の資料は、長頸壺のあり方からみて、馬場川の古い様相に対比されると思われる。久野部七ノ坪の資料は、S D 2 上層と下層に分けられるが、上述のとおり、その依存するところの中河内の編年には若干問題があり、したがってその中心は、一応、「上小版」期におきつつも、若干新しい様相を含むと考えたい。

以上のように考えられるなら、本遺跡の資料も上述の如く、久野部七ノ坪に準じて中河内の「上小版」期に対比可能と考えられる。ただ本遺跡の場合、後半以降に出現するとされる、手培形土器の出土が知られており、新しい様相も示している。したがって、本遺跡の土器には、およそ弥生後期中葉の年代が与えられると考えられる。

(2) 土師器・黒色土器の年代観

本遺跡の各構造より出土した遺物は、上述の弥生土器を除けば、大半が古代～中世に一般的にみられる日常雑器類である。ただ前項で述べたように、構造には若干の切り合いや方位のちがいがあり、遺物の場合も大きく分けて、鎌倉前期と鎌倉末～室町初の二時期に比定できる

と思われる。そこでここでは、主として出土例の多い土師器・黒色土器について検討を加えておきたい。

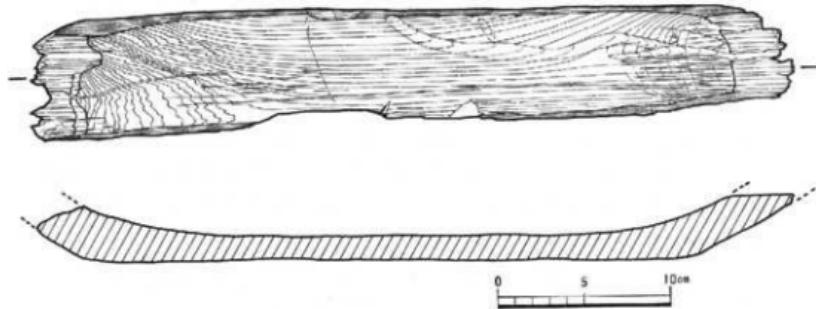
まず、平安末～鎌倉初期と考えられるものとしては、SE2、SE1とさきに第1グループとした建物群のものが上げられる。〈T-2〉SE2の遺物は、土師器小皿5点、黒色土器碗9点を図示したが、変遷の一応たどりうる黒色土器碗をみてみると、口径は15cm前後のものが多く、部体はやや内湾して、やや低いが逆台形の安定した高台の付くものが多い。内外面とも一部にヘラミガキを施し、いづれも指押え痕を残す粗い仕上げで、斜格子状の暗文を施しているが、剥落が激しく、残存するものは少ない。なお、口縁内側の沈線のないものもある。したがって、この種の黒色土器碗は、野洲町富波遺跡の出土例などに類似品がみられ、瓦器碗についての白石太一郎氏の編年を準用するなら、おおよそ12世紀後半、鎌倉時代前半に比定しうると考えられる。なお、SE2に切られる〈T-2〉兩側落ち込みからは、平安時代後半と考えられる、口縁端部をわざかにつまみ上げた土師器小皿が出土しており、上の想定を裏付けている。^(註22)^(註23)^(註24)

次いで、さきに第1グループとした竪立柱建物群(SB1・SB3・SB5・SB7・SB9)の柱穴出土のものについて検討を加えたい。

N-42°Eの軸を共有するSB1・SB7・SB9からは、内面に暗文を施し、やや低い安定した高台をもつ黒色土器碗や厚手の土師器皿が出土している。これらも、形態・手法などSE1出土例と類似するところ多いと考えられる。次に、〈T-2〉で検出されたSK2の遺物の場合、土師器小皿はBタイプ、Dタイプが1点づつ出土し、黒色土器碗もC・Dタイプが大半を占めるが、内外面黒色の高台が2点出土しており、12世紀代は降らないと考えられる。併出した須恵器鉢もほぼ並行する時期のものと思われる。

一方、鎌倉後期ないし室町初頭と考えられるものは、SE1および第2グループとした建物群出土の遺物を上げる。

まずSE1は、上述したようにSB2廃絶後の築造と考えられるが、出土数はきわめて少ない、すなわち、図示し得たのはわずかに黒色土器碗4点があるが、いずれも口径15cm前後の浅碗で、内面に簡単な暗文を付したもので、口縁がやや直線的になっていることなどから、上



第11図 木器実測図

述のEタイプに近く鎌倉後期に下るものであろう。^(註2)

又、さきに第2グループとした建物群や、それと同じ埋め土のピットからは土師器小皿とともに、さきにEタイプとした、体部が直線化し内面に簡単な暗文を施した黒色土器碗が出土しており、ほぼSE1に並行すると考えられる。

V む す び

以上、概略述べたように今回の調査で明らかになった点は、古代野洲川とされる「境川」に沿って弥生後期中葉と考えられる自然水路が発見され、上流に当該時期の集落跡が確實に予想しうること、当地域には境川・山賀川の微高地に上流に鎌倉後期および鎌倉後期から室町初期にかけての集落が営まれたこと、以上である。このうち前者については、現在のところその所在は判明していないが、当地域の北には金ヶ森西遺跡を中心とする古墳前期の集落が広がっており、現大門集落に重複して、弥生期の集落跡が所在している可能性が大きい。

後者については、当地域が周知のとおり、中世において政治的・宗教的な拠点であったことを考慮する時、当然の結果ともいえるが、先年実施された金ヶ森遺跡の調査でも、鎌倉～室町期の建物跡・井戸跡などが検出されており、当地域の繁栄ぶりを裏付けるものと言えるのである。^(註3)

註

- (1) 山崎秀二『遺跡分布調査報告書』(守山市教育委員会 1976)
- (2) 註(1)に同じ
- (3) 大橋信弥「守山市金ヶ森西遺跡出土の有孔円板について」(『滋賀文化財だより』18号 滋賀県文化財保護協会 1978)
- (4) 橋本久和「中世村落の考古学的研究」(『大阪文化誌』1-2) 原口正三「古代・中世の村落」(『考古学研究』92) 同「日本古代・中世史の『実証』的課題」(『日本史研究』136)
- (5) 野洲郡条里は、条が蒲生郡との都界を基点に、N-34°Eの方位を保って17条、里が成橋山東端を基点に14里をはかるとされる。(野洲郡教育会『野洲郡史』ほか)
- (6) 佐原真「畿内地方」(『弥生式土器集成』本編2 1968)
- (7) 中谷雅治ほか「鴨川遺跡」(『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』)、滋賀県教育委員会 1973) 田辺昭三ほか「湖西線関係遺跡調査報告」(滋賀県教育委員会 1973) 大橋信弥ほか「野洲町下緑子遺跡E・S地区の調査」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』IV-II 滋賀県教育委員会 1977)
- (8) 大橋信弥ほか「久野部遺跡発掘調査報告書一七ノ坪地区一」(滋賀県教育委員会 1977)
- (9) 檜崎彰一ほか「愛知県猿投山西南麓古窯址群」(愛知県教育委員会 1954)
- (10) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4)

- (11) 注(7)「鶴田遺跡」参照
- (12) 兼康保明「久野部遺跡発掘調査報告書—十ヶ坪地区—」(野洲都教育委員会 1977) 大橋信
弥ほか「久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—」(前掲)
- 丸山竜平「弥生時代から古墳時代へ」(『古代研究』12)
- (13) 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I 地点の土器」 同「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺
跡D・E・F・H地点の土器」(『弥生式土器集成』資料編I 1958) 坪井清足「穗積式土器」
(『日本考古学辞典』 1963) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』80)
- (14) 森田克行「安満遺跡発掘調査報告」(高槻市文化財調査報告第10号 高槻市教育委員会 1978)
- (15) 石野博信「三世紀の高城と水城」(『古代学研究』68)
- (16) 丸山竜平「弥生時代から古墳時代へ」(前掲)
- (17) 兼康保明ほか「久野部遺跡発掘調査報告書—十ヶ坪地区—」(前掲)
- (18) 丸山竜平 前掲論文
- (19) 別所健二「SD2出土の弥生土器について」(『久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—』
前掲)
- (20) 森田克行 前掲書
- (21) 丸山竜平ほか「富波遺跡調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』 昭和48年度 滋賀県教育委
員会 1975)
- (22) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」(『古代学研究』54) ほかに稻垣哲也「
法隆寺出土の瓦器塊—瓦器塊編年試論—」(『大和文化研究』6-4) 橋本久和「中世日常雜
器類の分析・高槻市における編年試論—」(『大阪文化誌』7) 参照
- (23) 田辺昭三ほか「平安京跡発掘調査報告書—左京四条一坊—」(平安京調査会 1976)
- (24) 大橋信弥ほか「久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—」(前掲)
- (25) 近く報告書が刊行される。

出土遺物観察表

〈T-1〉 包含層

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒色土器	皿 B	B 001	口径 8.4	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部はやや外反する。	○粘土板成形 ○体部下半に指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	碗	B 002	高台 0.5~0.6	○高台は、断面逆三角形を呈し、端部はやや外にひらく。	○粘土紐巻き上げ ○貼り付け高台	○内外面黑色 ○胎土、焼成良
		B 003	底径 5.8~6.6			

〈T-1〉 SB1

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土師器	皿 C	H 004 H 005	口径 8.0~11.0 器高 1.2~1.6	○底部は平底で、体部はゆるやかに内湾し、口縁は外反する。	○粘土板成形 ○体部下半指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良 (P 6-C) (P 20-C)

〈T-1〉 ピット内

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	皿 A	H 006	口径 9.0	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は大きく外反する。	○粘土板成形 ○体部下半指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良 (P 4-C)
		H 007	口径 8.0~11.0 器高 1.2~1.6	○底部は平底で、体部はゆるやかに内湾し、口縁は外反する。	○粘土板成形 ○体部下半指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良 (P 26-C) (P 4-C)
	皿 C	H 008	口径 13.8~14.0 器高 2.3	○底部はやや凹み気味の平底で、口縁はゆるやかに内湾し、端部は外反する。	○粘土板成形 ○体部下半指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良 (P 26-H) (P 26-C)
器	皿 II	H 009 H 010	口径 15.0	○体部は、ほぼ直線的に口縁にのび、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈様。	○粘土紐巻き上げ ○外面下半に指押え	○外面一部および内面、黒色。外面、淡褐色。 ○胎土、焼成良 (P 24-H)
黒色土器		B 011	高台 0.9 底径 7.4	○断面逆三角形の高台である。		

〈T-1〉 SK1

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
須恵器	碗	C 012	高台 0.9 底径 7.4	○断面逆三角形の高台である。	○糸切り底 ○貼り付け高台 ○内外面ナデ	○灰白色 ○胎土、焼成良

〈T-2〉 包含層

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	B	H 013 H 014	口径 9.0~9.4 器高 1.3	○底部は平底ないし丸底で、口縁部は内反する。	○粘土板成形 ○内外面指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	C	H 015	口径 9.4	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面指押え ○外面、口縁部内面ナデ	○淡褐色 ○胎土、焼成良
黑 色 土 器	C	B 016	口径 14.8	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部はやや外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線一束。	○粘土絆巻き上げ ○内外面ナデ ○体部外面下半に指押え	○内面、外面一部黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良
	D	B 017	口径 15.8	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部はやや外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に沈線一束。	○粘土絆巻き上げ ○内外面横ナデ、外面下半に指押え	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良
	E	B 018	口径 13.4	○体部は直線的に斜上方にのびる。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土絆巻き上げ ○内面に暗文	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良
須 恵 器	A	C 019	口径 15.0	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。	○内外面ナデ	○淡灰色 ○胎土、焼成良
	B	C 020	口径 10.0 器高 3.3 高台 0.6 底径 5.6	○体部は内湾し、口縁部はやや外反、端部を丸くおさめる。 ○断面逆三角形の高台でやや外にひらく。	○内外面横ナデ ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ ○糸切り底	○淡灰色、内面一部釉 ○胎土、焼成良

〈T-2〉 SB 2

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	A	H 021	口径 8.6 器高 1.8	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は大きく外反、端部を丸くおさめる。 ○底部は丸底。	○粘土板成形 ○内外面ナデ ○外面指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良 (P13-C)
	C	H 022	口径 10.2	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、後は指押え	○淡褐色 (P13-C) ○胎土、焼成良
F	H 023	口径 9.2	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は大きく外反、端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ ○外面下半指押え	○淡褐色 (P13-C) ○胎土、焼成良	

〈T-2〉 ピット内

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	C	H 024	口径 12.0	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部はやや外反する。薄手の皿。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、後は指押え	○淡褐色 (P27-H) ○胎土、焼成良

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒色土上器	壺	B 0 2 5	高台 0.3 底径 5.4	○断面連三角形の低い高台、外に大きく開く。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ ヘラミガキ	○内面、黒色 外面、黒褐色 ○胎土、焼成良好

〈T-2〉 南側落ち込み

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土器	壺 F	H 0 2 6	口径 9.2	○体部はゆるやかに内汚し、口縁部は大きく外反し、端部を内側に折り上げ肥厚させる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ ○外面下牛指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良好
黒色土上器	壺 C	B 0 2 7	口径 15.0	○体部は内溝し、口縁部はやや内反、端部を丸くおさめる。(口縁内側の沈線なし)	○粘土紐巻き上げ ○内外面ナデ ○外面指押え	○内面、一部外面黒色 外面、黒褐色 ○胎土、焼成良好

〈T-2〉 SE 1

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒色土器	壺 D	B 0 2 8 1	口径 15.0~15.8	○体部はゆるやかに内汚し、口縁部はやや外反、先端を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○内外面ナデ、後は指押え ○内面、斜方向に暗文(B 0 3 0)	○内面、黒色 ○外面、黒褐色 ○胎土、焼成良好
		B 0 3 1	高台 0.4 底径 4.4	○断面連三角形の高台。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○淡褐色 ○胎土、焼成良好

〈T-2〉 SE 2

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土器	壺 AII	H 0 3 2	口径 14.8	○体部はゆるやかに内汚し、口縁部は外反する。平底を呈す。	○粘土板成形 ○内外面指押え	○淡褐色 ○新土、焼成良好
		H 0 3 3 1 H 0 3 6	口径 7.6~8.4 器高 1.6	○底部は平底ないしやや凹気味の平底で体部はゆるやかに内溝し、口縁部は内反、端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、後指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良好
黒色土上器	壺 C	B 0 3 7 1 B 0 3 9	口径 14.4~14.8	○体部は内溝し、口縁部はわずかに外反して、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。(B 0 3 8) 沈線のないものもある。(B 0 3 7, B 0 3 9)	○粘土紐巻き上げ ○口縁部内外ナデ ○外面下牛指押え ○内面斜格子状暗文(B 0 3 8)	○内面、一部外面黒色 ○外面、黒褐色 ○胎土、焼成良好
		B 0 4 0 1 B 0 4 1	口径 15.0~15.2	○体部はゆるやかに内溝し、口縁部はわずかに外反して、先端を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○外面下牛に指押え	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良好

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒 色 土 器	E B 0 4 2	口径15.0 器高 4.2 高台 0.6 底径 5.0		○体部は低くゆるやかに内湾し、口縁部はやや外反、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。 ○高台は低い逆台形を呈す。	○粘土紐巻き上げ ○貼り付け高台 ○内外面指押え	○内面、一部外面黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良好
				○断面逆台形の安定した高台。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデの上からヘラミガキ	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良好
		B 0 4 3	高台 0.8 底径 5.0	○逆台形の低い高台、大きく外傾し、端部内面が着地する。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ、指押え	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良好

〈T-2〉 SK2

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	B B 0 4 6	口径 9.8		○体部はゆるやかに内湾し、口縁部はわずかに内反、端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、内面指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良好
				○体部はゆるやかに内湾し、口縁部はやや内反、端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ、内面指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良好
黒 色 土 器	C B 0 4 8 B 0 4 9	口径 15.0~15.4 器高 5.5 高台 0.5 底径 6.2		○体部は内湾、口縁部はわずかに外反して、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。(B 0 4 8) ○低い逆台形の高台。	○粘土紐巻き上げ ○内外面ナデ、後指押え	○内面、一部外面黒色 ○外面、黒褐色 ○胎土、焼成良好
				○体部は低くゆるやかに内湾し、口縁部は少し外反して、先端を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。(B 0 5 0)	○粘土紐巻き上げ ○内外面ナデ、後指押え	○黑褐色 ○胎土、焼成良好
土 器	E B 0 5 0 B 0 5 1	口径 0.4~0.8 器高 4.8~6.4		○逆台形の高台。やや外開きで、端部内面が着地する。 ○底部外間にヘラで、「X」印を刻む。(B 0 5 3)	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ、ヘラミガキ	○内面、黒色 ○外面、黑色 ○胎土、焼成良好
須 恵 器	鉢	C 0 5 4	底径 16.8	○半底で、体部は内湾にゆびる。 ○外側下半にヘラカキ沈線。	○粘土紐つみ上げ ○内外面ナデ、後指押え	○灰色 ○胎土、精良 ○焼成、堅緻

〈T-3〉 包含層

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	皿 D	H 0 5 5	口径 9.2	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は内反し、端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面ナデ	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良好

〈T-3〉 ピット内

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土器 脚付器	A	H 0 5 6		○脚部上端から外下方へゆるやかに開く。	○粘土紐込み上げ	○淡褐色 (P-13) ○粘土、焼成良
黒色土器	C	B 0 5 7	口径15.6	○体部は内湾し、口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ ○内外面ナデ、後指押え	○内面、黒色 外面、淡灰褐色 ○粘土、焼成良 (P-101C)
	E	B 0 5 8	口径14.8	○体部はゆるやかに内湾し、口縁端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ ○体部外端下半指押え	○内面、一部外面黒色 外面、淡灰褐色 ○粘土、焼成良 (P-101C)
須恵器	环	C 0 5 9	高台 1.0 底径 8.0	○逆台形の高い高台で外に開くため内面端部が着地する。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○淡灰色 ○粘土上、精良 ○焼成、堅緻 (P-13)

〈T-3〉 SB 3

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
白磁	塊	P 0 6 0	口径16.8	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外側に折り曲げ、端部を肥厚させる。	○体部は丁寧にヘラミガキ	○内面、白色の触感 ○粘土上、精良 ○焼成、堅緻 (P-5)

〈T-5〉 SB 7

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土器	C	H 0 6 1	口径 9.2	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。	○粘土板成形	○淡褐色 ○粘土、焼成良 (P-16-C)

〈T-5〉 SB 8

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土器	F	B 0 6 2	口径 9.6	○体部はやや内湾気味で、口縁部は直線的にのびる。	○粘土板成形 ○内外面指押え	○淡赤褐色 ○粘土、焼成良 (P-3 C)
黑色土器	C	B 0 6 3	口径 14.6~15.4	○体部はゆるやかに内湾し、端部を丸くおさめている。 ○口縁内側に一束の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○内外面指押え ○内面に暗文を施す	○内面、一部外面黒色 外側、淡褐色 ○粘土、焼成良 (P-3 C) (P-3 C) (P-3 H)
	D	B 0 6 6 B 0 6 7	口径 14.0~14.8	○体部は内湾し、口縁部はやや外反して端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一束の沈線。 (B 0 6 7)	○粘土紐巻き上げ ○内面に暗文 (B 0 6 7)	○内面、一部外面黒色 外側、淡褐色 ○粘土、細砂少量含有 ○焼成良 (P-3 C)

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒色土器	壺	B 0 6 8	高台 0.6 底径 5.0	○低い高台で、端部を外に引き出す。	○貼り付け高台	○内面、黒色 外面、淡褐色 ○粘土、焼成良好 (P - 3 C)

〈T-5〉 ピット内

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
須 恵 器		C 0 6 9	口径14.6 器高 3.8 高台 0.4 底径11.0	○体部はやや内湾気味にのび、端部を丸くおさめる。体部は底部から大きく屈曲し、底部はほぼ水平。 ○やや外方にのびる低い高台。	○内外面横ナデ ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ ○ヘラ切り不調整 上からナデ	○淡灰色 ○粘土、精良 ○焼成、堅緻 (P - 29 C)

〈T-6〉 北側落ち込み

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 師 器	壺 A	H 0 7 0	口径10.4	○体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。端部は鋭どく、平底を呈す。	○粘土板成形	○淡褐色 ○粘土、焼成良好
須 恵 器	壺	C 0 7 1	底径10.0 高台 0.9	○体部はわずかに内湾気味に外上方へのびる。 ○高い断面近三角形の高台で外縁に段をつける。	○器体内外面横ナデ ○貼り付け高台、貼り付け後ナデ	○青灰色 ○粘土、精良 ○焼成、堅緻
	壺	C 0 7 2	底径12.6	○体部は底部から大きく屈曲し、やや内湾して立ち上がる。底部は平底。	○内外面横ナデ	○青灰色 ○粘土、精良 ○焼成、堅緻

〈T-7〉 ピット

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒色土器	壺	B 0 7 3	高台 0.7 底径 6.0	○やや高い高台で、大きく外方に開き、端部を丸くおさめる。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ、外面、ヘラミガキ	○内面、黒色 外面、淡褐色 ○粘土、焼成良好 (P 4 - H)

〈T-8〉 北側落ち込み

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
弥 生 土 器	壺 A	E 0 7 4	口径16.4	○外反する頸部にやや内湾気味にのびる口縁部をつける。端部はわずかに内傾して先端部を平坦におさめる。	○内面、横方向にハケ目調整	○淡褐色 ○粘土、外面に 0.5 mm位の石粒多く含有 ○焼成良好

器種	器 形	国版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徵	成形手法の特徴	備 考
甕	B	E 075	口径10.8	○体部と頸部の境界に一段の縫をつくる。 ○頭部は丸く外溝して、口縁部は斜め上方に屈曲してのび、端部先端を外側に引き出し、平担におさめる。	○外面、粗いハケ目 (斜方向) 内面、指押え	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良
	C	E 075	口径 8.0	○細頭で漏斗状に開く 口縁部で頸部を丸くおさめる。	○口縁部内面、ハケ目 指押え	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良
	D	E 077	口径 8.6	○口縁部は外溝して立ち上がり、端部を丸くおさめる。頸部に列点文をめぐらす。	○外面、斜方向の粗い ハケ目 内面、斜方向と横方 向のハケ目	○淡茶褐色 ○胎土、焼成良
	E	E 078	口径 8.4	○口縁部はラッパ状に大きく開き、丸くおさめる。	○内面、指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	F	E 079	口径13.6	○体部はやや内溝氣味にのびる。 ○頸部は丸く外溝し 口縁部は直線的に斜上方へのび、端部を丸くおさめる。	○内外面、ハケ目 内面、指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
生	a	E 080 ↓ E 084	底径 2.4~ 4.0	○平底、ないし、やや上げ底気味のややシャブに突出した底部(E 081, E 082)。 ○底部外面に3条の沈線(E 081)。	○内面、ハケ目 外面、ヘラケズリ (E 080) 内面、指押え	○淡褐色 (E 081, E 082) ○淡赤褐色 (E 080, E 083 ~ E 084) ○胎土、焼成良
	b	E 085 ↓ E 086	底径 4.8~ 5.2	○平底でわずかに接地しない部分があるが、大きく屈曲して体部へと続く。 (E 085)	○内外面、ハケ目 外面、指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
土 底 部	c	E 087 ↓ E 088	底径 2.8~ 4.0	○上げ底で大きく開いて、体部へ続く。	○内外面、粗いハケ目 内面、指押え	○暗灰色 ○胎土、焼成良
	d	E 089	底径 8.0	○大きな径の平底で、直線的に斜上方へ立ち上がる。	○外面、ヘラケズリ	○淡褐色 ○胎土 1mm 大の細砂多量 含有、焼成良
甕	I	E 090 ↓ E 091	口径 17.2~17.6	○頭部は「く」字に外溝し、口縁部は内反して、ほぼ直に立ちあがり、口縁部を平担におさめる。 ○口縁部外面には列点文、頸部外面に一条の沈線。 (E 091)	○頸部外面に指押え、 また粗いハケ目を残す。	○淡褐色 ○胎土、細砂多し 焼成良
	A	E 092 ↓ E 097	口径 13.0~22.0	○頭部は大きく外反するものと、ゆるく外溝するものがあるが、口縁部は屈曲して外上方へ立ちあがり、	○口縁部内外面横ナデ 指押え。 ○頸部外面にハケ目調 整したあと、ヘラ指 き沈線(E 095)。	○淡褐色 ○胎土、細砂多し 焼成良

器種	器形	國版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
彌生器	A I II			○口縁端部を僅かに外方につまみだし、半扭ておさめる。 ○口縁部に列点文を有するものと(E 093)沈線を有するものがある。	○口縁部内外面共横ナデ調整 ○体部内面上半に指押え(E 098)	
	A E 098 I E 102 III	口径 16.8~20.0		○頸部は大きく外反し、口縁は短く立ち上がる。 ○口縁部外面は指で強くなでるため四状を呈する。 ○口縁端部内面に棱をもち、口縁部と体部上半に刺突列点文を有するものがある。	○口縁内外面横ナデ	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	A E 103 I E 106 IV	口径 14.8~16.0		○口縁部はやや外湾気味に短く立ち上がり、端部先端は四状を呈する。 ○口縁部に刺突列点文頸部に一束の沈線を有する。(E 106)	○口縁内外面横ナデ ○頸部内面にハケ目を残す。	○淡褐色 ○胎土、細砂含有 焼成良
	A E 108 I E 109 V	口径 18.0~19.0		○頸部は短く屈曲し、口縁は外湾気味に立ち上がる。 ○口縁端部を大きく外方へつまみ出し、端部は鋭い。 ○口縁部に刺突列点文頸部に一束の沈線を有する。(E 108)	○口縁内外面横ナデ ○頸部にハケ目調整	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	E 110 I E 112 VI	口径 14.6~16.6		○頸部は大きく外湾し、口縁部はさらにも外湾気味に立ち上り、端部が僅かに外方へつまみ出され、とがり気味に丸く取れる。 ○口縁部に刺突列点文(E 111)	○口縁内外面は横ナデによるが頸部以下ハケ目調整	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	I E 113 V E 115	口径 12.2~16.8		○頸部は大きく外反し、口縁は短く、鋭い立ち上がりを呈する。 ○口縁部外面は指で強くなでるため四状を呈する。 ○口縁端部は内面に棱をもち、又、E 115の先端部は四状を呈す。 ○E 113は口縁部に刺突列点文と体部上半に三条の沈線を有す。 ○E 114は口縁部と体部上半に刺突列点文又、頸部にへらによる割み目を有す。 ○E 115は口縁部にへらによる割み目。	○口縁内外面は横ナデ ○体部内面上半に指押え、外間にハケ目痕を残す	○淡褐色 ○胎土、焼成良

器種	器形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
甕	B	E 116	口径19.0	○「く」字形に外反するやや厚手の口縁部で、口縁端部を平担に取める。	○口縁部内面にヘラミガキ、頸部内外面以下にハケ目を施す。	○暗褐色 ○胎土、焼成良
		C E 117	口径16.6	○口縁部はゆるやかに外反し、端部を丸く取める。	○調整不明	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良
	a	E 118	底径 4.0~4.6	○ほぼ平底に近い底部であるが、外側にわずかに接地しない面を残す。	○内面ハケ目調整	○灰褐色 ○胎土、細砂含有 (E 119) 焼成良
		E 119				
甌	b	E 120	底径 4.4~5.0	○突出気味の底部で、ほぼ完全な平底。 ○体部はゆるやかに内收する。	○内外面指揮え	○淡褐色 ○淡赤褐色(E 121) 胎土、焼成良
		E 122				
	c	E 123	底径 3.6~5.2	○やや上げ底気味の底部で、腹部へ向けて大きく外方へ開く。	○器体内外面ハケ目調整、接指揮え	○暗褐色 ○胎土、焼成良
		E 128				
盆	d	E 129	底径 3.8~4.0	○ほぼ平底に近い小さな底部で、体部は直線的に立ち上る。	○器体内外面ハケ目調整 ○内面に指揮え	○暗褐色 ○胎土、焼成良
		E 131				
	e	E 132	底径 4.2~4.6	○底部外縁中央に僅かに接地しない凹面を持つ、上げ底、大きく開く体部。	○内外面指揮え	○暗褐色 ○胎土、焼成良
		E 133				
土器	A	E 134	口径 15.4~27.4	○やや内済する环底部から口縁部が屈折して立ち上り外反する接合面に鈍い段をつくり环縁部を丸く收めている。	○調整不明	○淡褐色 ○赤褐色(E 135) ○胎土、焼成良
		E 137				
	B	E 138	口径14.0	○やや小さい底部から口縁部は直線的にのび、端部は外反して先端を丸く取める。	○調整不明	○淡赤褐色 ○胎土、焼成良
		E 139		○円錐形の外反気味にひらがる柱状部に、下方で大きくひらく祀部をつくる。 ○脚部下方に円孔を4孔穿っている。	○外向は縱方向にヘラミガキ ○内面は、柱状部ではしばり模をけすため指揮えをしている。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
器	E 141			○短い脚部で「ハ」字に外反して大きく開く。 ○脚部下方に円孔を4孔穿っている。	○外面は縱方向にヘラミガキ ○内面下方はヘラケズリを施す(E 142)。	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		E 143				
	E 144		底径 10.4~14.0	○やや外湾気味になだらかに開く縫部 ○縫縁部をやや外に引き出し、丸く取める。 ○縫部下方に円孔を穿つ。	○外面ヘラミガキ	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		E 145				
	E 146		底径 13.6~19.4	○柱状部から大きく外反して、外湾気味に聞く縫部で、端部は丸く取るものと、端部を切りとって狭い面をなすものとがある。	○外向はヘラミガキを施し、内面はハケ目調整	○淡褐色 ○胎土、焼成良
		E 148				

器種	器形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
弦 生 土 器	A	E 149	口径17.2	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は直線的に外上方にのび、口唇部は肥厚して口縁部端部を下方にわざかに拡張する。 ○口縁部端部に竹管文をめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内外面共横ナデの上に、内面は指押え ○頸部外面にヘラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡灰褐色 ○胎土、焼成良好
	B	E 150	口径 15.6~21.0	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部はやや外湾し端部を斜下方に壓下させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○内外面横ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡褐色(E 150) 赤褐色(E 151) ○胎土、焼成良好
		E 151				
		E 152		<ul style="list-style-type: none"> ○受部は脚部から大きく外反してのびる。 ○脚部はゆるやかに外反して下方に開く。四ヶ所に円孔。 	<ul style="list-style-type: none"> ○脚部外面にヘラミガキを施し、受部にハケ目調整 ○内面に指押え 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡赤褐色 ○胎土、焼成良好
		E 153				
		E 154		<ul style="list-style-type: none"> ○脚部は底部から裾へかけて直線的に小さく開き、裾部に巻き。 ○受部は内面に棱を成して直線的にのびる。 ○脚部下方に円孔を4孔穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○外面ヘラミガキ ○内面ハケ目調整 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡褐色 ○胎土、焼成良好
		E 155	底径 10.8~19.2			
		E 156		<ul style="list-style-type: none"> ○脚部から直線的に大きく開く裾部。 ○脚部は下方へ小さく上方へは大きく拡張し、外間に一集の沈緑をめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○内外面ヘラミガキ、後内面に指押え(E 155) ○内外面ハケ目調整 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡褐色 ○胎土、焼成良好
	手 縫 形 土 器	E 157				
				<ul style="list-style-type: none"> ○腹部は鉢部とともに作られゆるやかに内湾し、立ち上がる。 ○鉢部は口縁が「く」字形に外反し、体部は胴中央で最大径をとり、口縁よりやや大きい。底部は欠失しているが、おそらく平底に近い丸底と考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁立ち上がり部に割み目をめぐらし全体中央部に割み目のある突帯を2条、体部上半に沈緑を数条その下に斜線文を一部交錯してめぐらす ○内面はヘラ削りのあと上半をナデ調整し、外側はハケ調整を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡褐色 ○胎土、焼成良好

〈T-9〉包含層

器種	器形	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	成形手法の特徴	備考
土 師 器	A	H 158	口径14.0	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部は直線的に斜上方にのび、端部を丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○粘土板成形 ○内面指押え 	<ul style="list-style-type: none"> ○茶褐色 ○胎土、焼成良好
	B	H 159	口径 9.2 器高 1.9			
				<ul style="list-style-type: none"> ○丸底で、体部はゆるやかに内湾し、端部を丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○粘土板成形 ○内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ○淡褐色 ○胎土、焼成良好

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
土 器 器	皿 C	H 1 6 0 H 1 6 1	口径 8.6~14.0	○底部はやや丸底気味で、体部はゆるやかに内消し、口縁部は外反して端部を丸くおさめる。	○粘土板成形 ○内外面指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
	D	B 1 6 2	口径13.8	○体部はゆるやかに内消し、口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。 ○口縁内側に一条の沈線。	○粘土紐巻き上げ ○体部内面指押え	○淡茶褐色 ○胎土、焼成良
	E	B 1 6 3	口径16.6	○体部はほぼ直線的にのび、口縁部はわずかに内反して端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ ○体部外面指押え	○淡灰褐色 ○胎土、焼成良
		B 1 6 4	高台 0.5 底径 5.0	○逆台形の低い高台で端部がやや外傾する。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良
土 器 器	羽 釜 A	H 1 6 5	口径15.0	○口縁部は内傾し、端部は方形を呈する。 ○つばは断面三角形で端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ ○口縁部内外面ナデ ○体部内面ハケ	○内面、茶褐色 ○外面、淡茶褐色 ○胎土、焼成良
陶 器	鉢	K 1 6 6	口径21.0	○体部は直線的に斜上方へのび、口縁部は肥厚させて外方へわずかに笠張する。 ○端部はやや丸くおさめる。	○内外面機ナデ	○暗赤紫色 ○胎土、砂粒含有 ○焼成、堅緻

〈T-10〉 包含層

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黑色土器	埴	B 1 6 7	口径10.0	○体部はゆるやかに内消し、端部を丸くおさめる。	○粘土紐巻き上げ ○体部外面指押え	○黑色 ○胎土、焼成良
	埴				○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○灰白色 ○胎土、精良 ○焼成、堅緻

〈T-13〉 包含層

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
J. 壺	壺	H 1 6 9	底径 5.0	○平底の底部で、体部はわずかに屈曲してのびる。	○不明	○淡赤灰色 ○胎土、焼成良
	壺				○粘土板成形 ○内外面指押え	○淡褐色 ○胎土、焼成良
黑色土器	壺	H 1 7 0	口径 8.2 器高 1.5	○底部は中央がやや凹み、体部はゆるやかに内消して、端部はやや外反し、丸くおさめる。	○貼り付け高台 ○貼り付け後ナデ	○内面、黒色 ○外面、淡灰褐色 ○胎土、焼成良

器種	器 形	図版番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	成形手法の特徴	備 考
黒色土器	壺	B 172	高台 0.5 底径 5.4	○断面逆台形の低い高台で、外下方にひらく。	○貼り付け高台 ○貼り付け後、外面、ヘラ押え	○内面、黒色 ○外面、淡褐色 ○胎土、焼成良
須恵器	壺	C 173	口径16.0	○体部は直線的に斜上方にのび、端部を丸くおさめる。	○内外面横ナデ	○黒青灰色 ○胎土、精良 ○焼成、堅緻
灰釉		A 174	底径 4.6	○底部は平底で、内湾氣味にゆるやかに立ち上り、体部へと続く。	○外面ヘラケズリ ○内面横ナデ	○灰色 ○胎土、精良 ○焼成、堅緻
	壺	A 175	口径13.4	○短かく外湾して開く頸部に、やや内湾氣味に立ち上がる口縁部がつき、端部を丸くおさめる。 ○口縁部下半に 2 条の沈線をめぐらす。	○内外面横ナデ	○暗青灰色の胎がかかる ○胎土、精良 ○焼成、堅緻

図 版



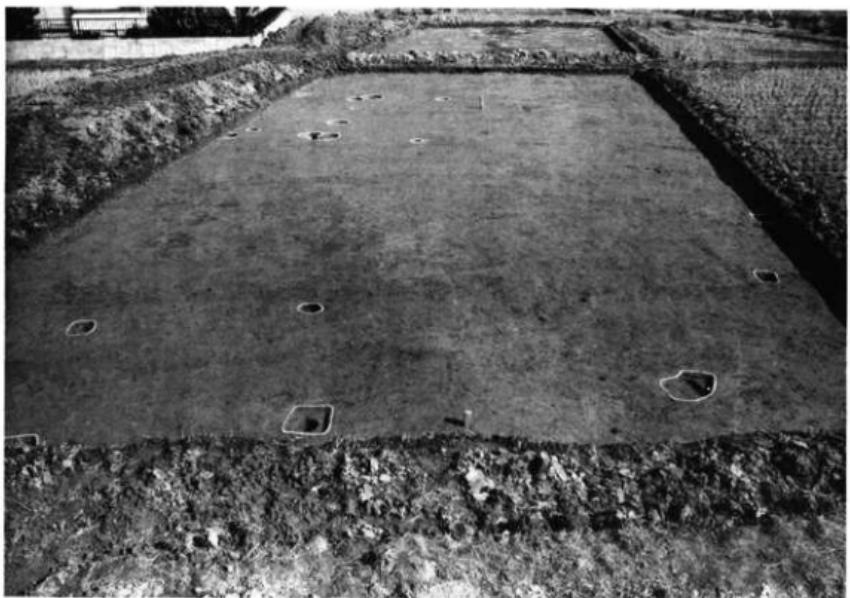
1. 〈T-1〉 全景 (南より)



2. 〈T-2〉 全景 (南より)



1. 〈T-3〉 全景 (南より)



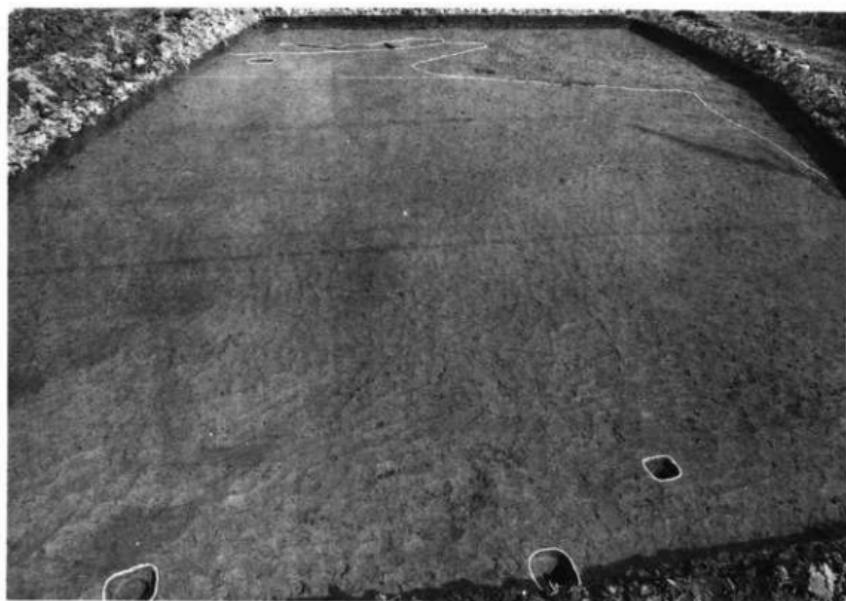
2. 〈T-4〉 全景 (南より)



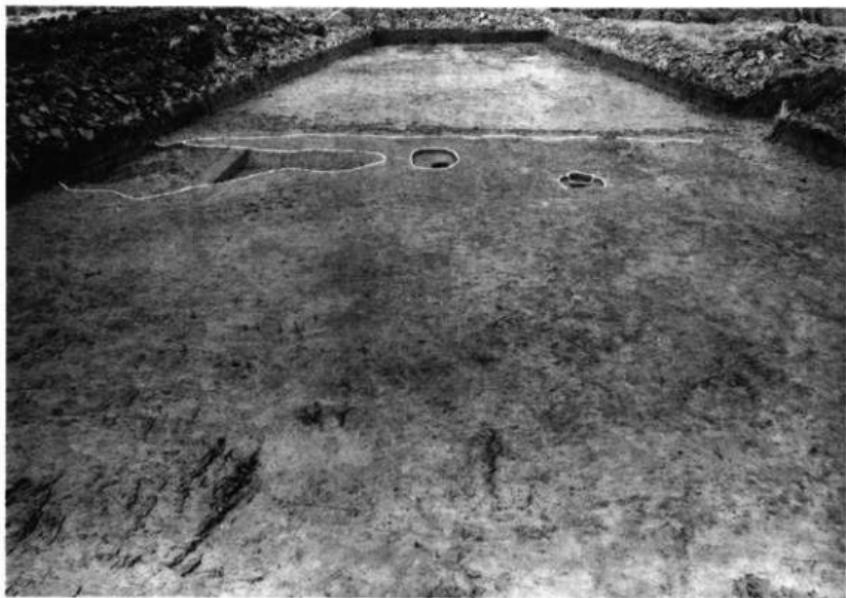
1. 〈T-5〉 全景 (西より)



2. 〈T-6〉 全景 (北より)



1. 〈T-7〉 全景 (南より)



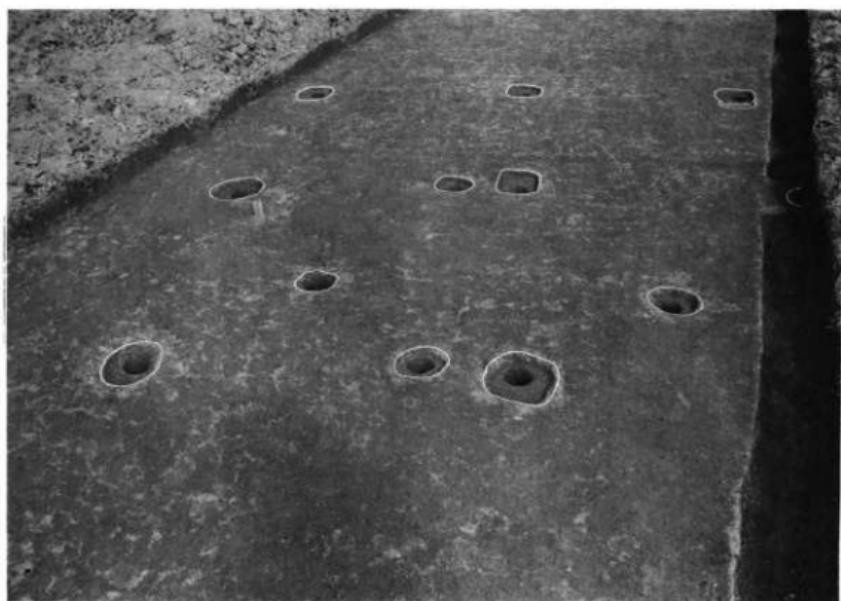
2. 〈T-8〉 全景 (南より)



1. S B1 近景（東より）



2. S B2 近景（南より）



1. S B3 近景 (南より)



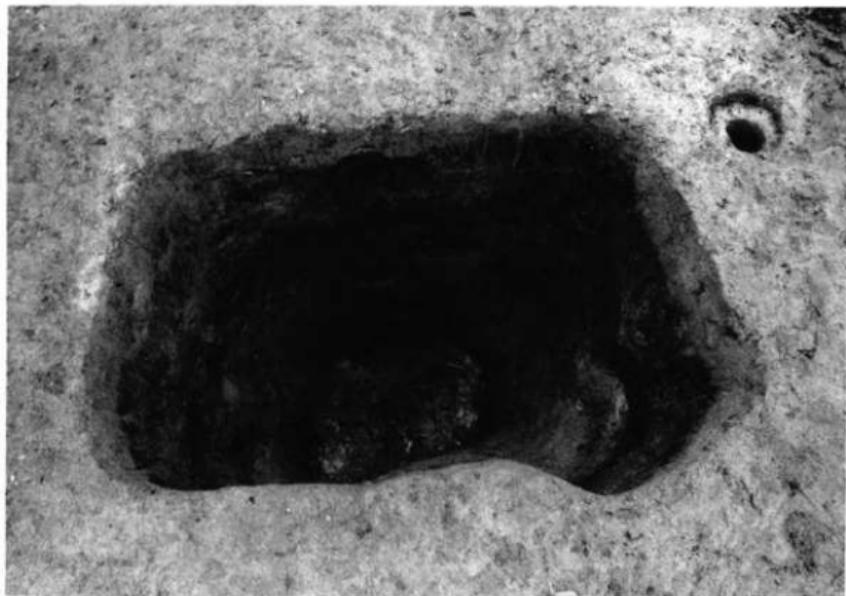
2. S B6 近景 (南より)



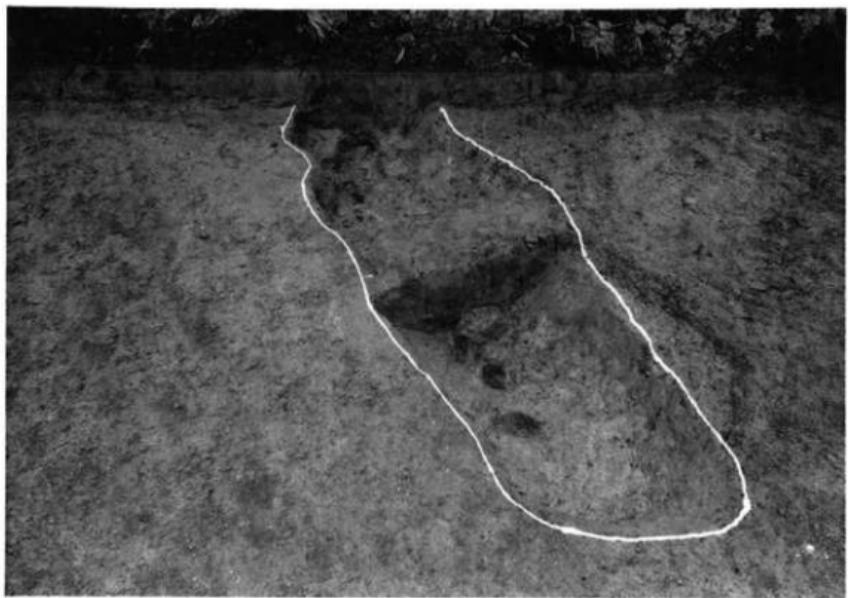
1. SB7 SB8 SB9 近景（南より）



2. SE2 近景（南より）



1. S E1 近景 (南より)



2. S K2 近景 (東より)



1. (T-8) 北側落ち込み近景 (南より)



2. 柱穴近景 (南より)



H 004



H 005



H 006



H 010



H 012



C 020



H 021



H 022



B 030



H 032



H 033



H 036



B 063



B 067



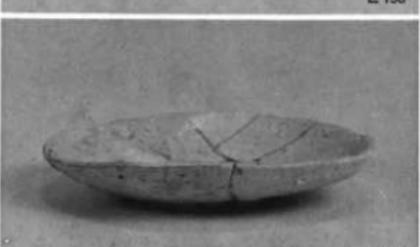
C 069



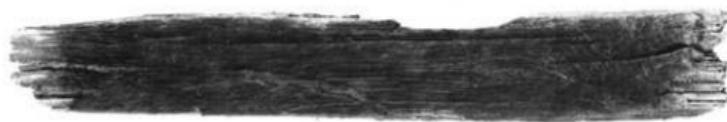
E 138



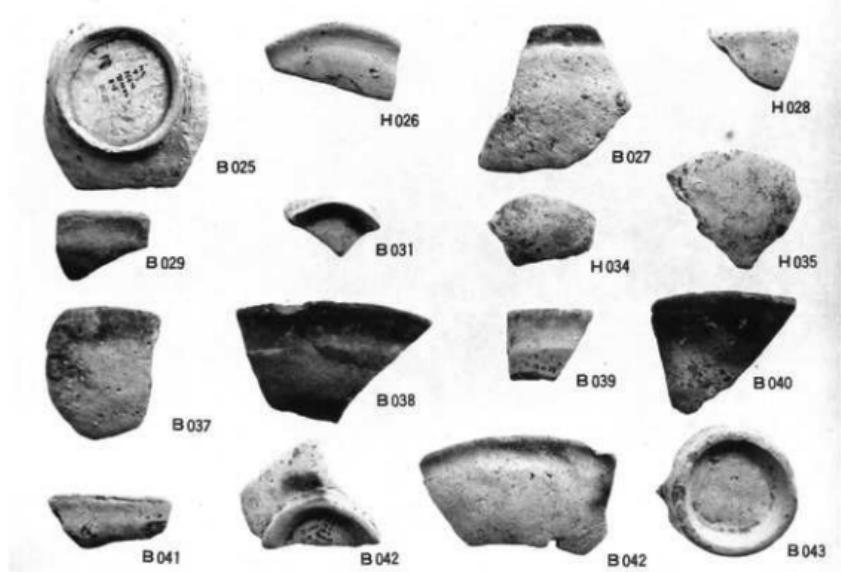
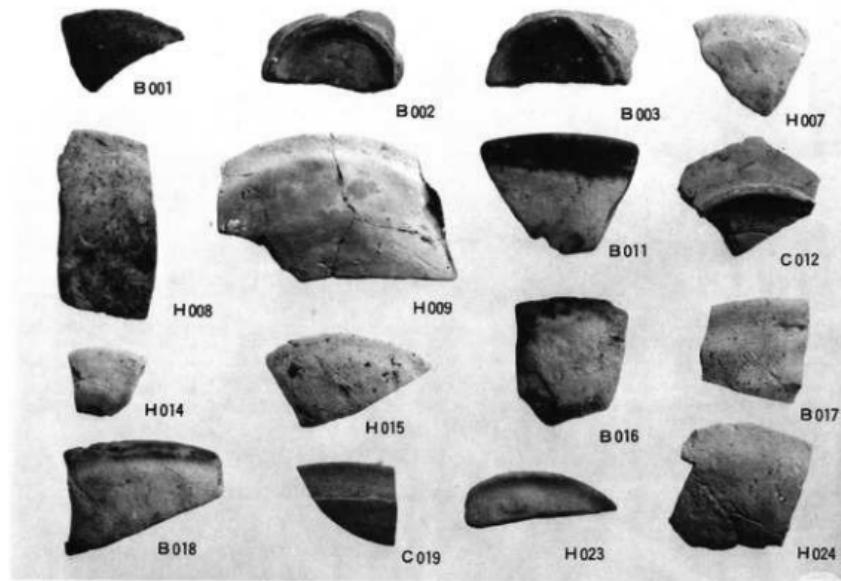
E 155

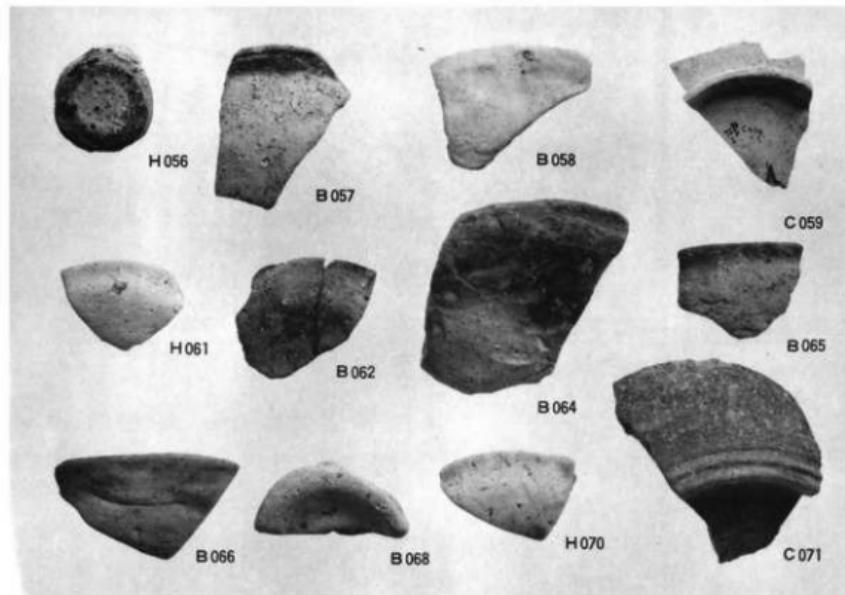
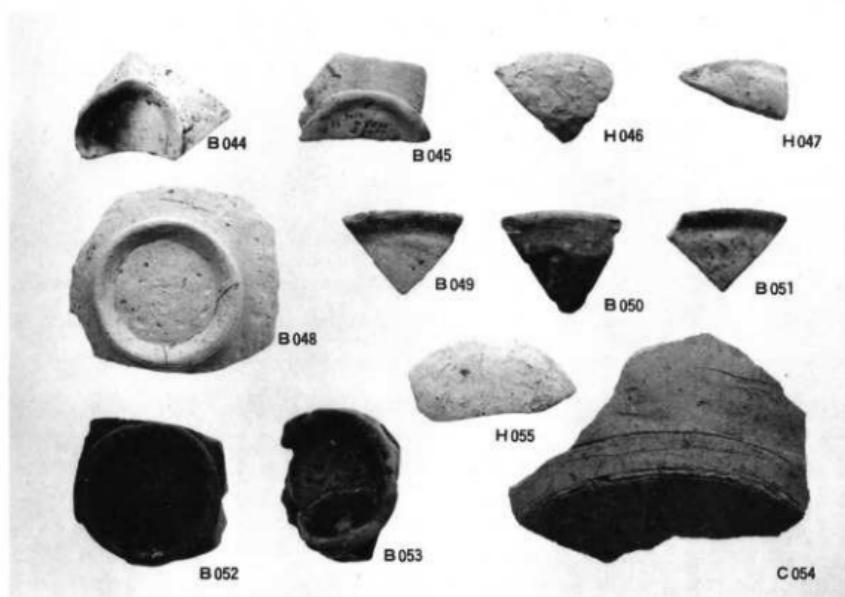


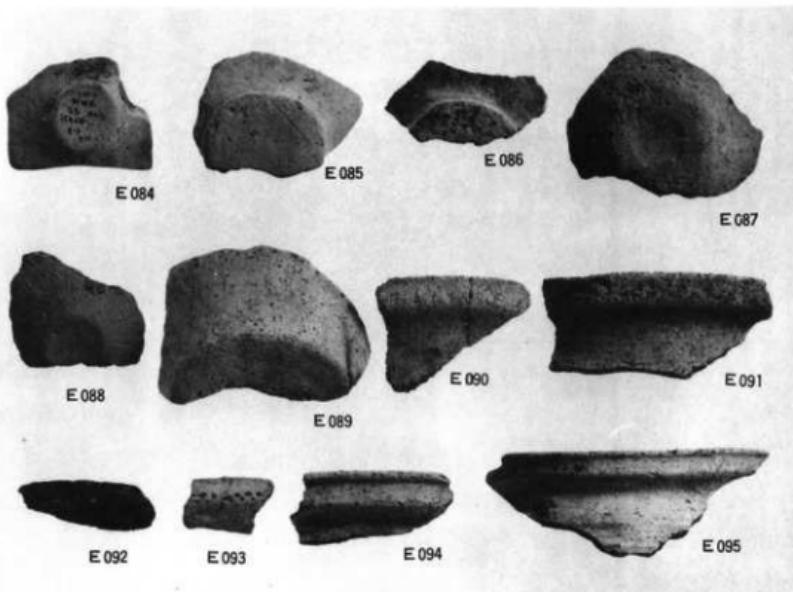
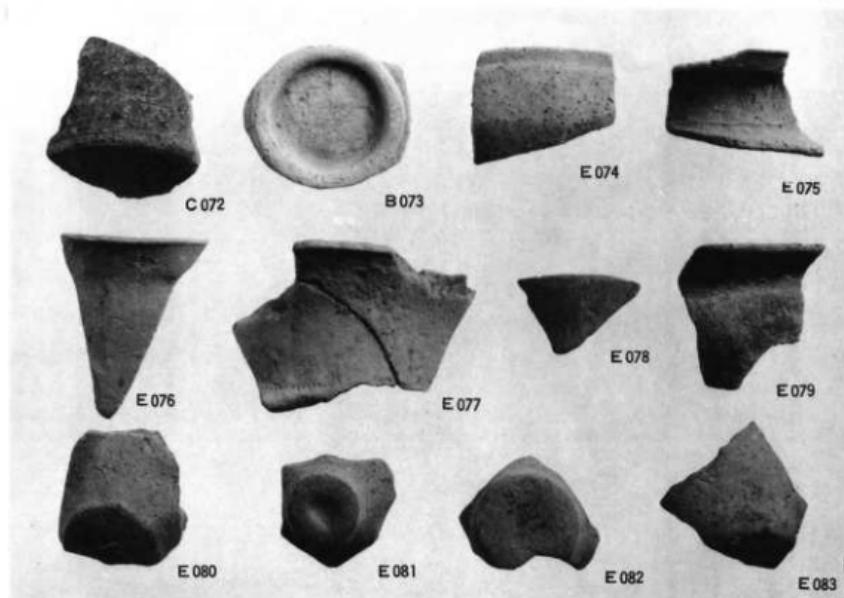
H 159

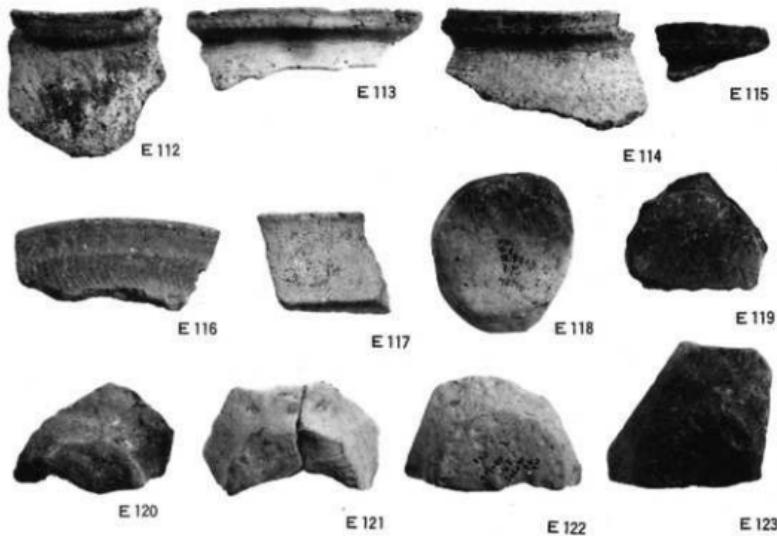
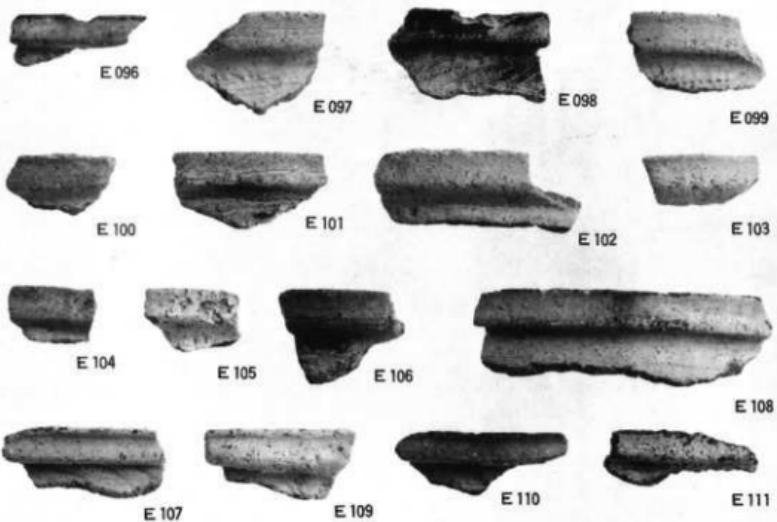


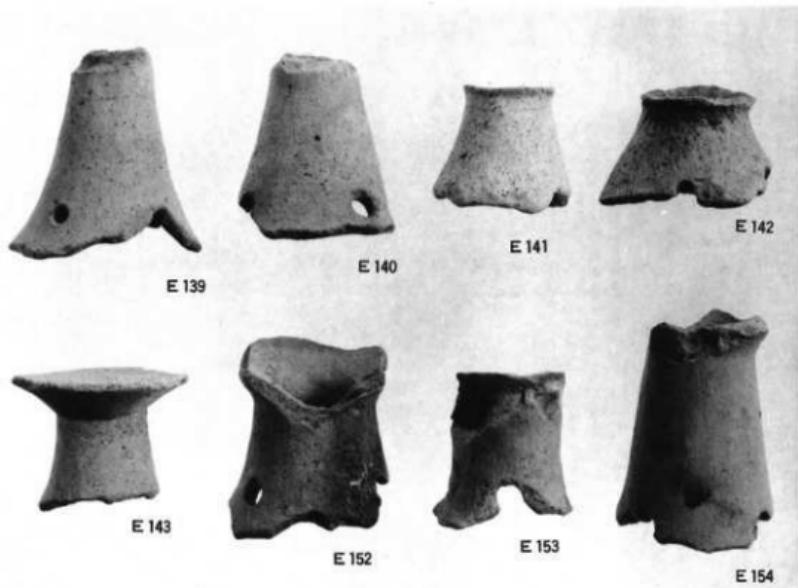
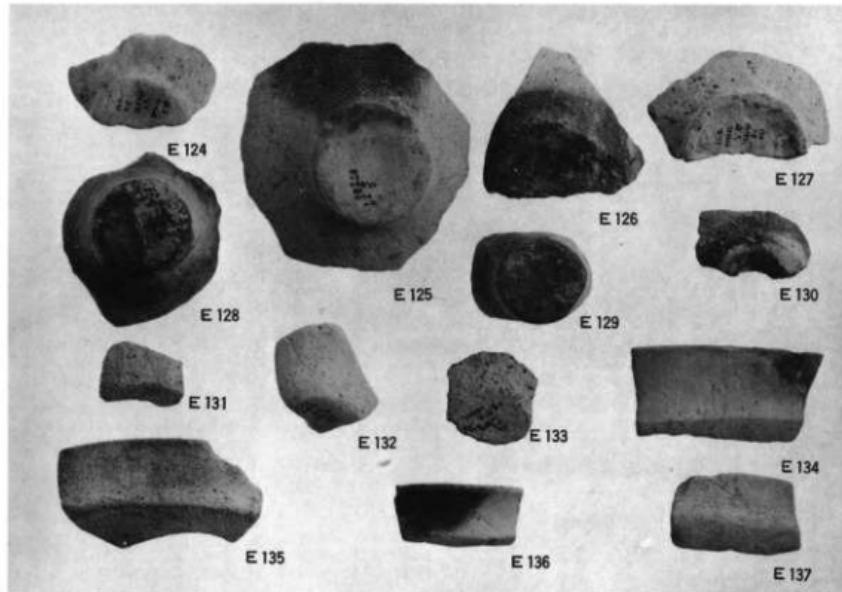
C W1

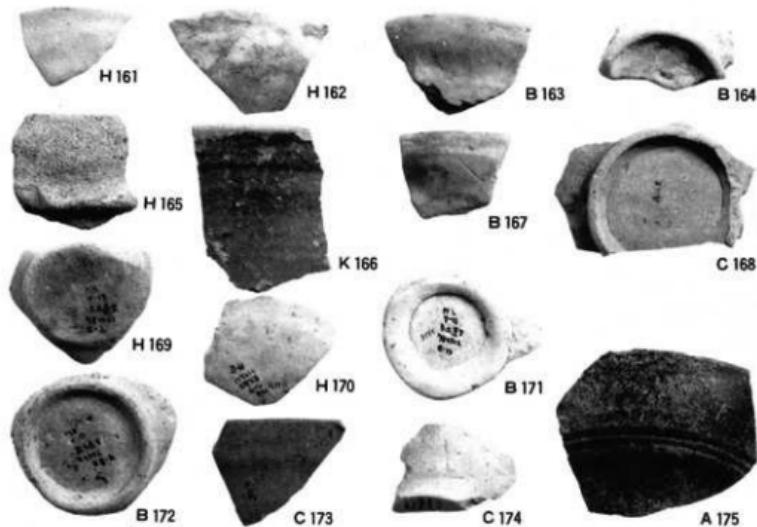
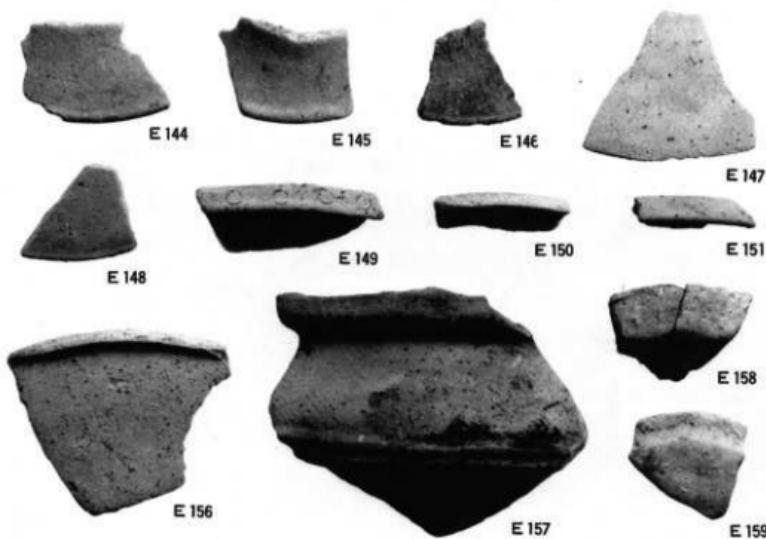


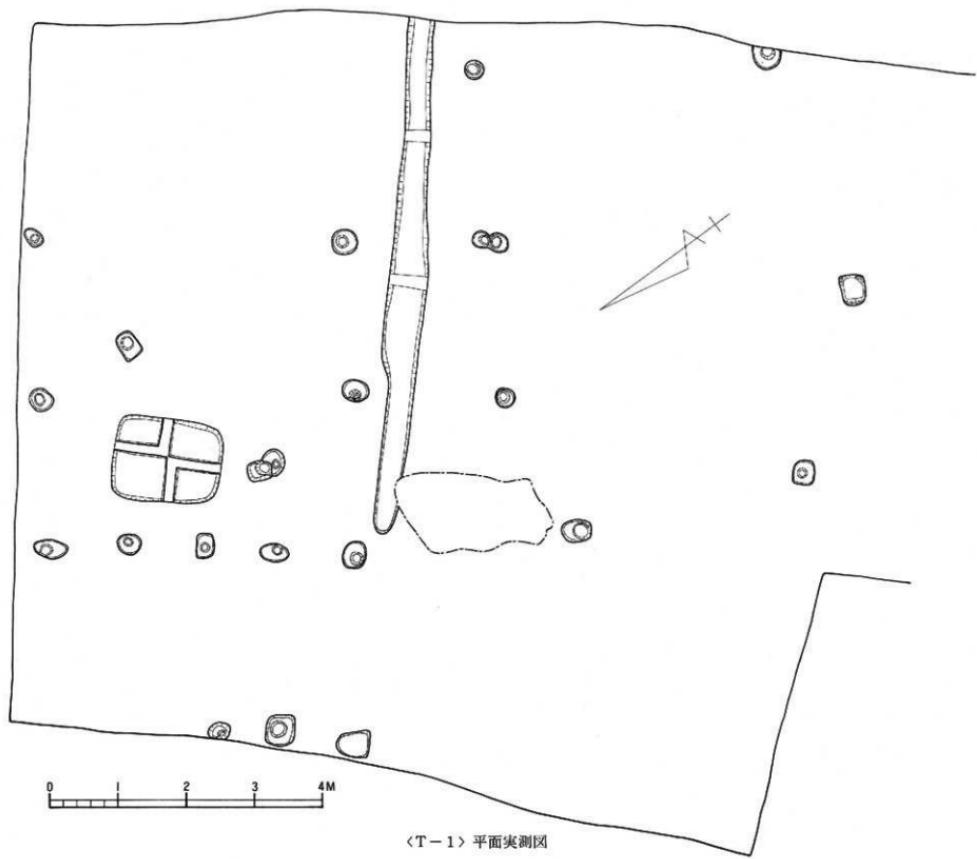






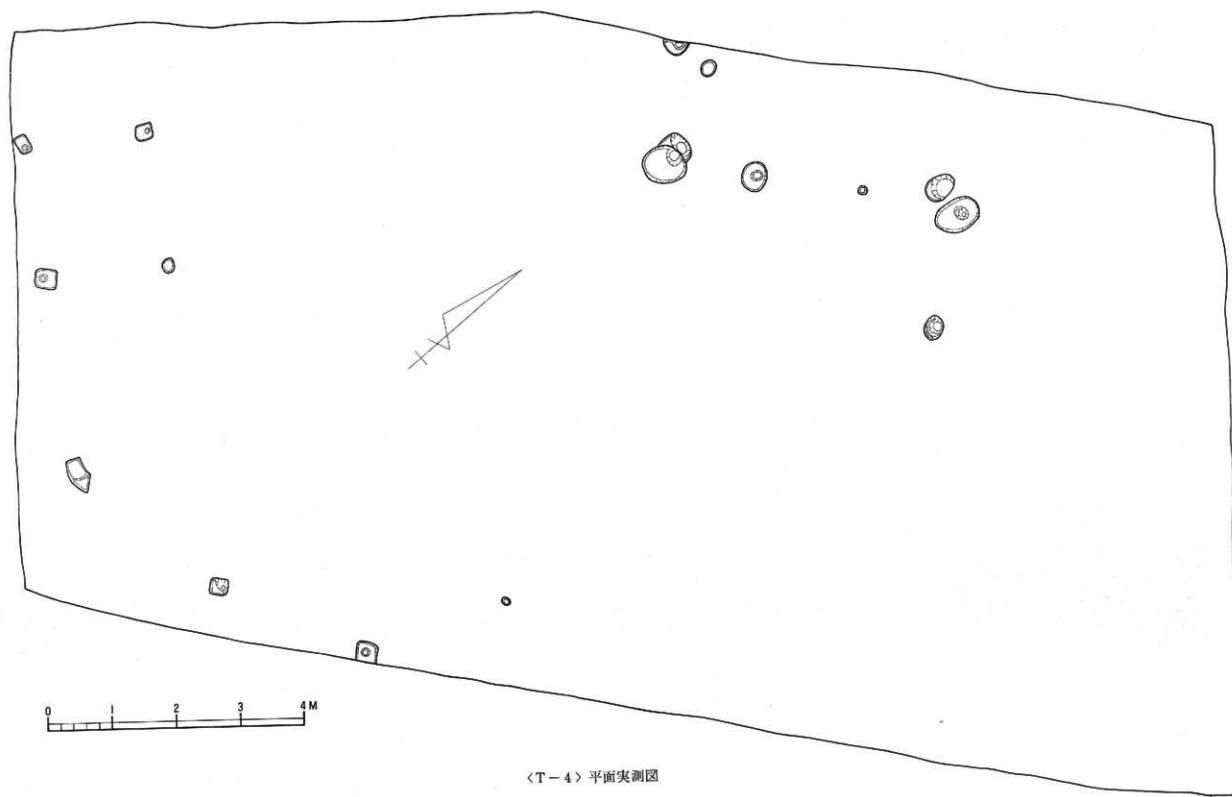


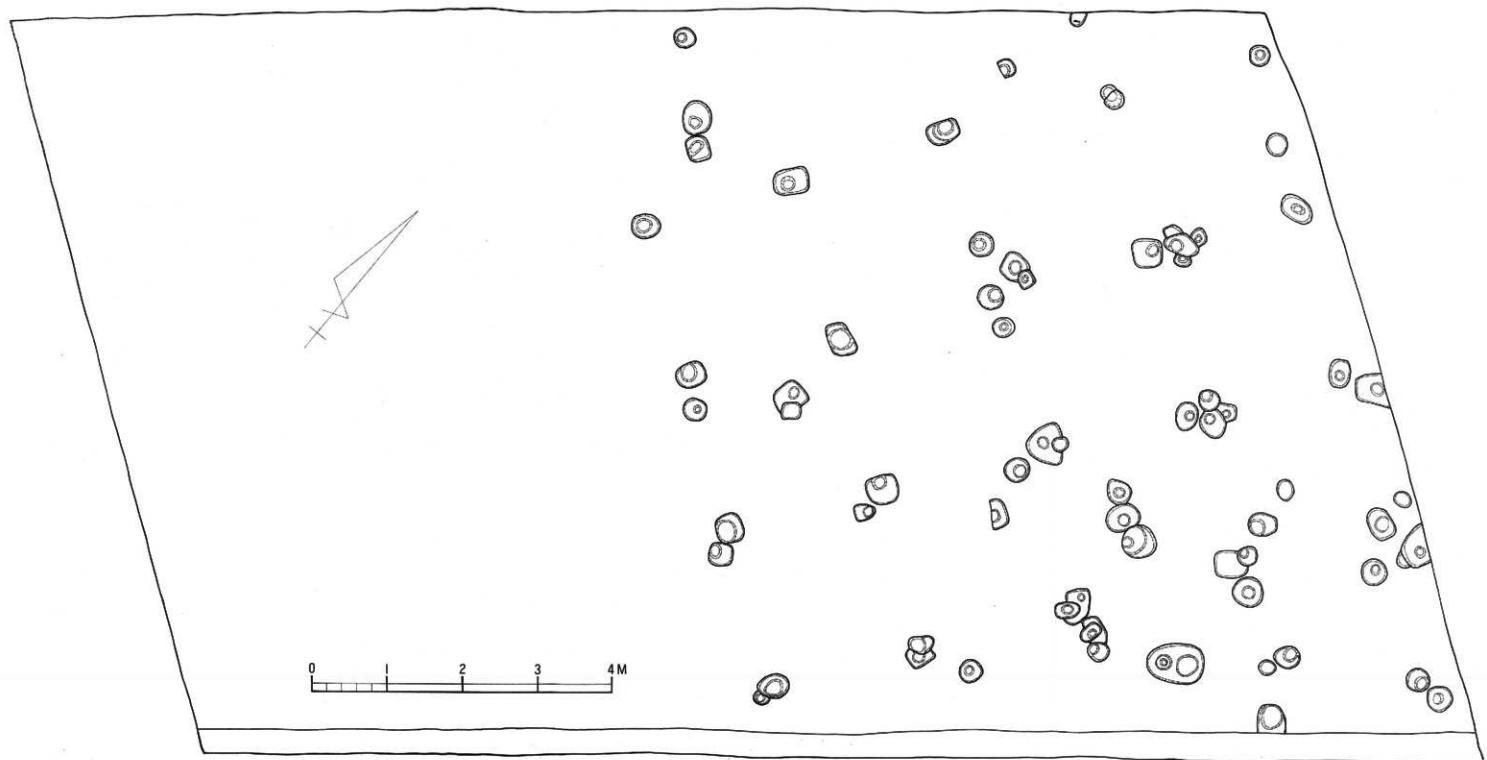




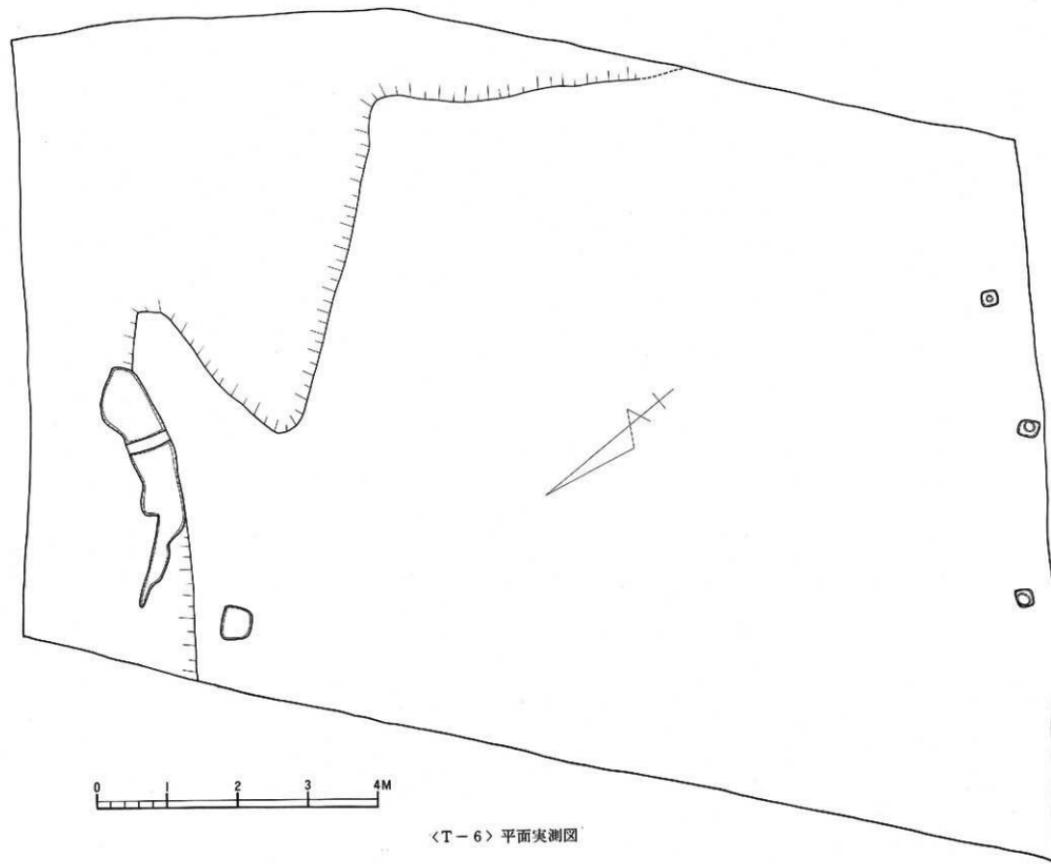


< T - 2 > 平面実測図

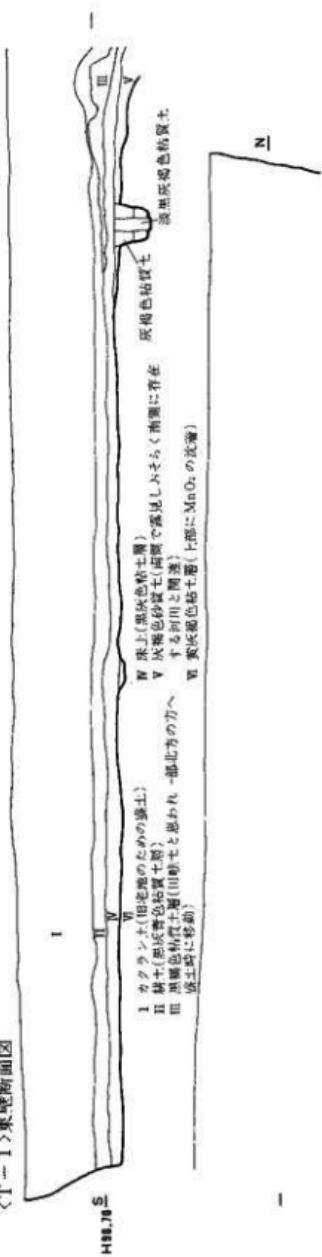




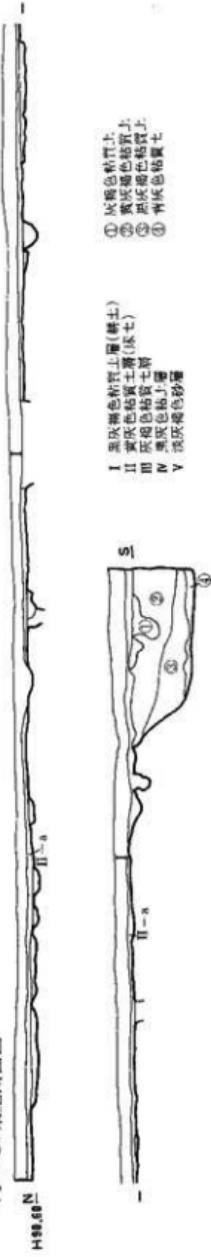
〈T-5〉平面実測図



< T - 1 > 東壁断面図



< T - 2 > 東壁断面図



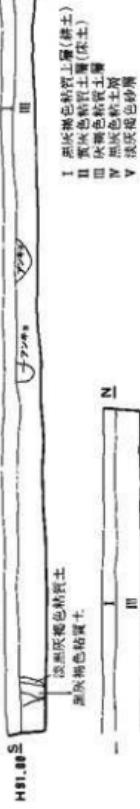
< T - 3 > 東壁断面図



(T-4) 東壁断面圖
H81.88 S



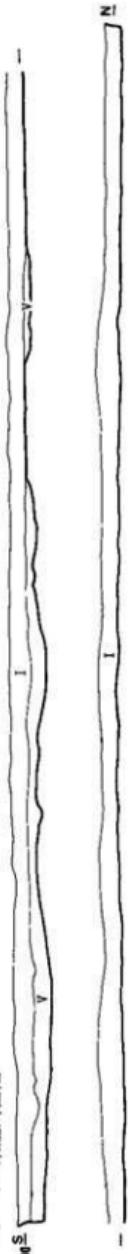
(T-5) 東壁断面圖
H81.88 S



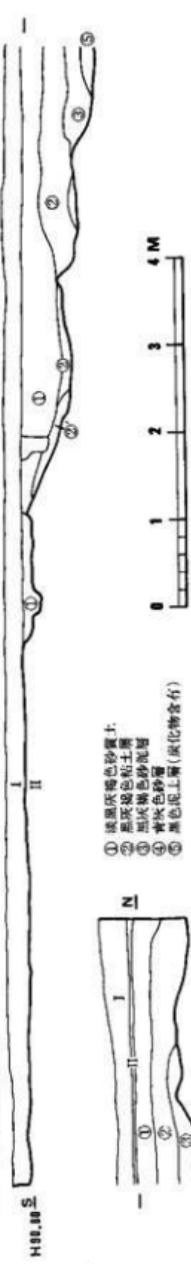
(T-6) 西壁断面圖
H81.88 N



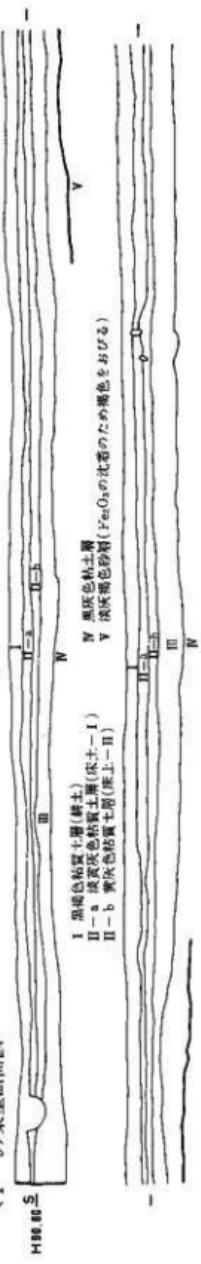
(T-7) 東壁断面圖
H81.88 S



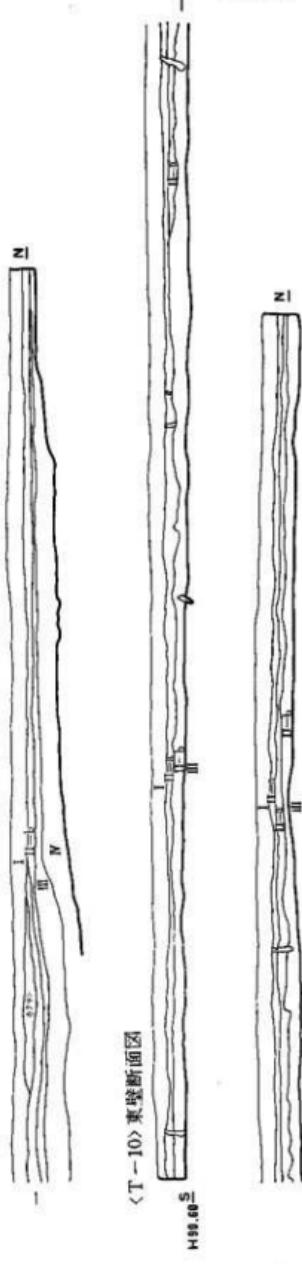
< T - 8 > 東壁断面図

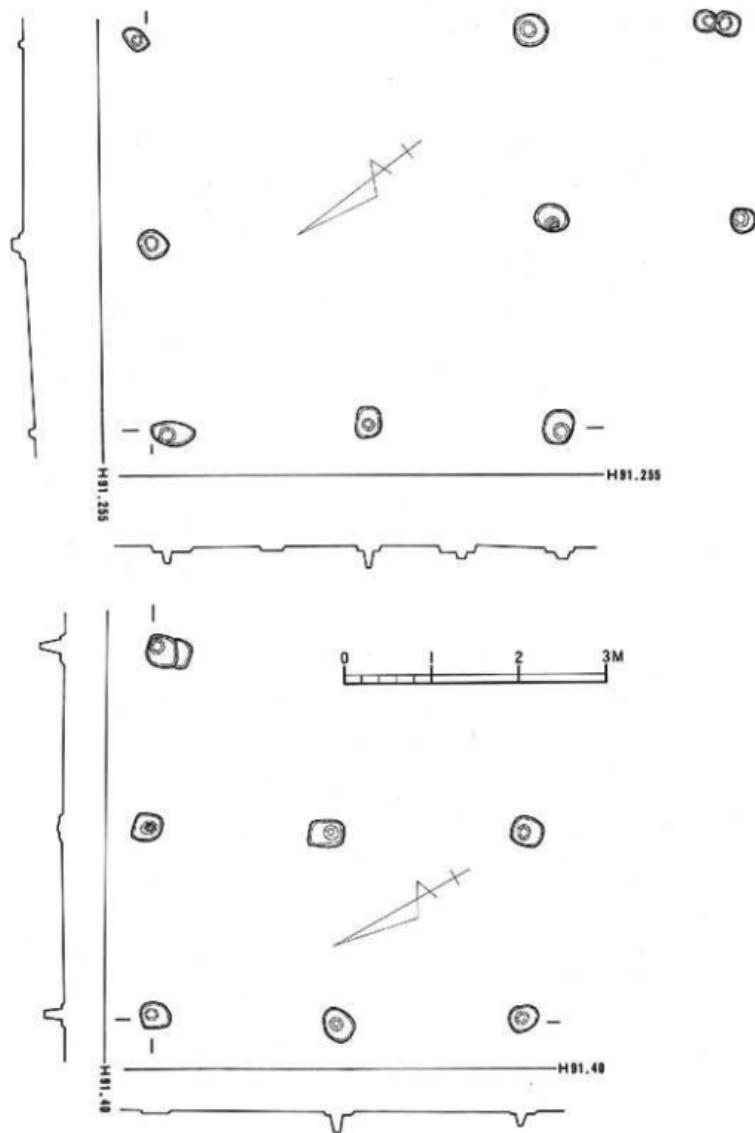


< T - 9 > 東壁断面図

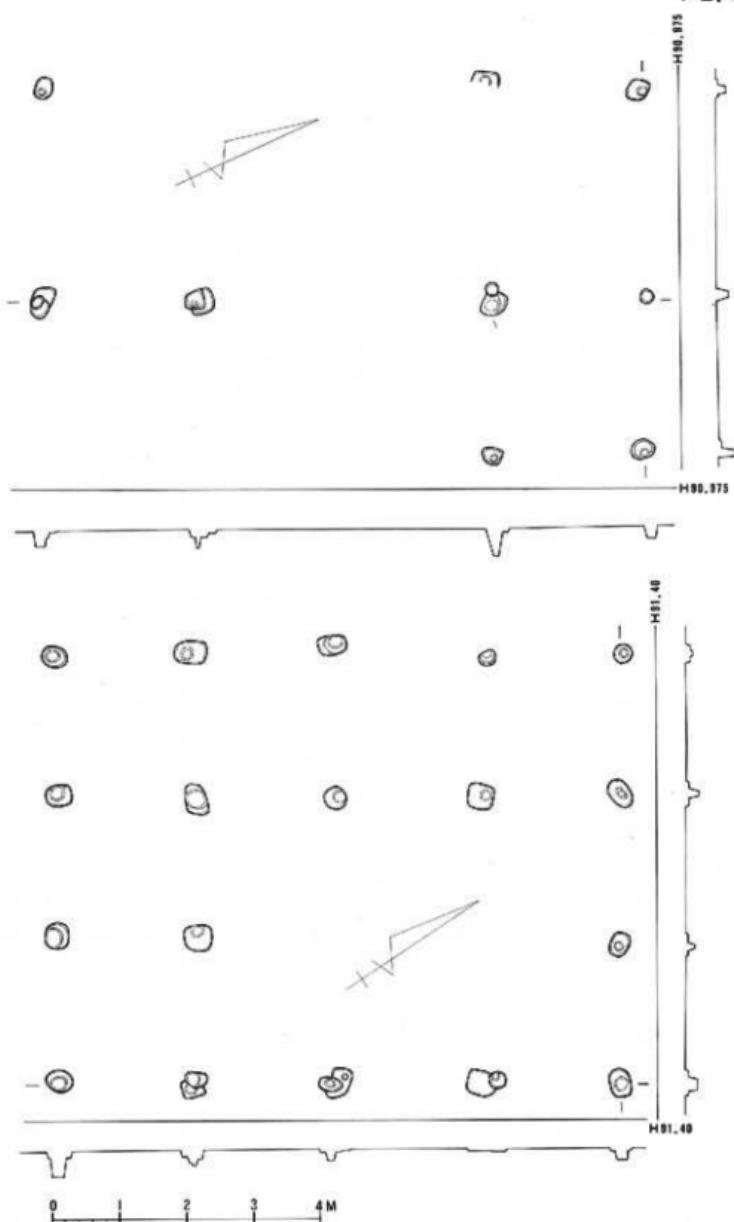


< T - 10 > 東壁断面図

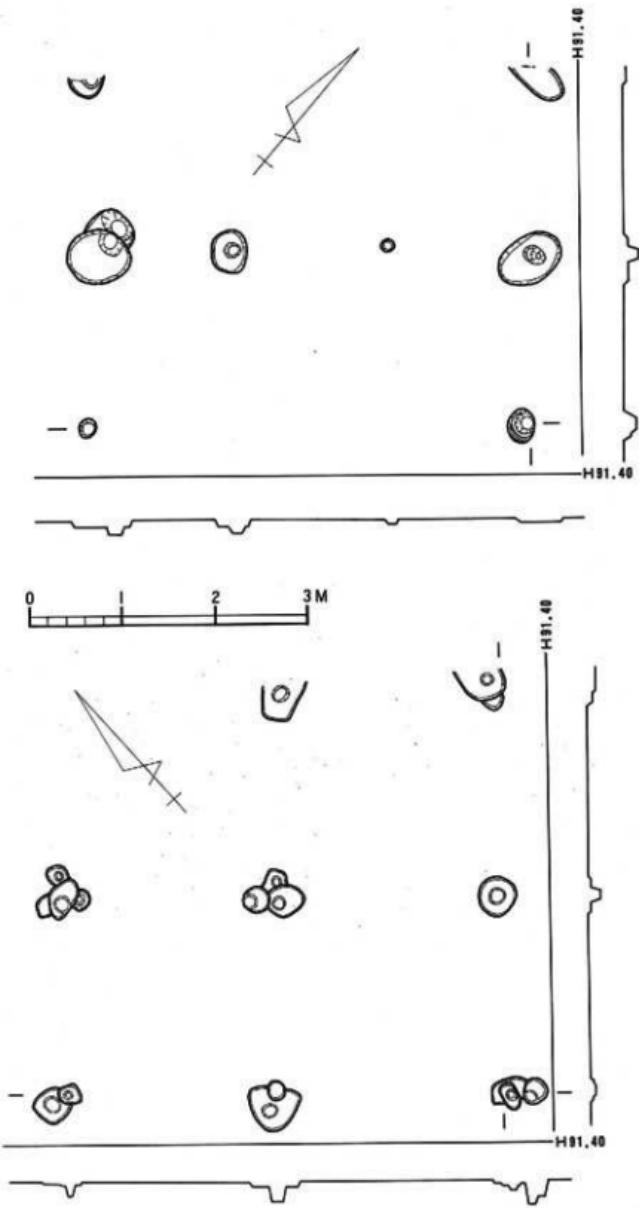




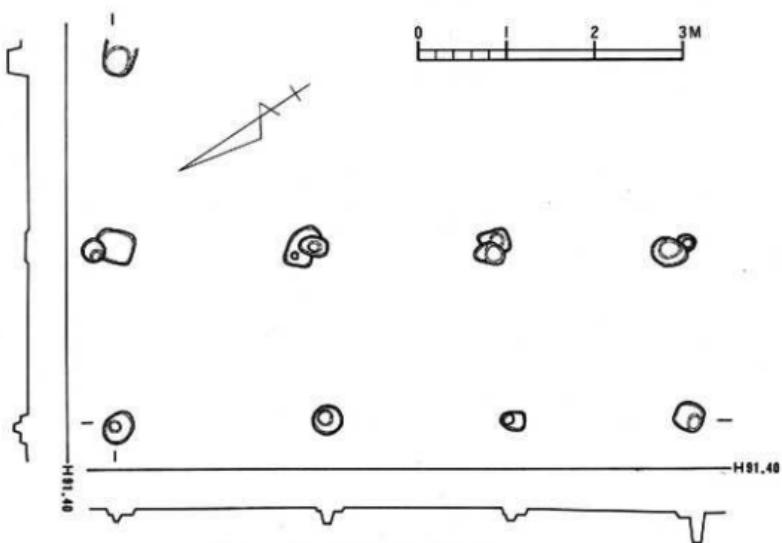
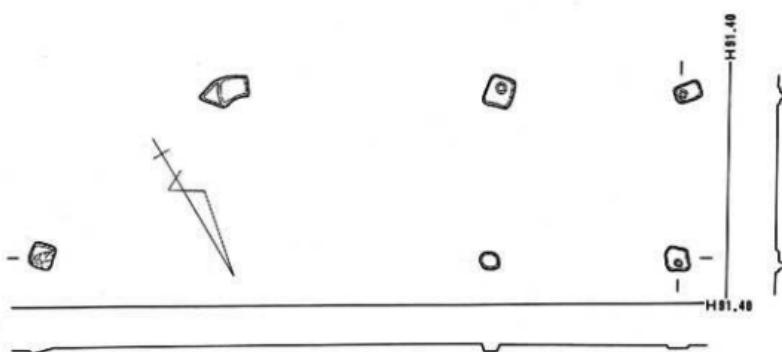
S B 1 (上), S B 3 (下)平面实测图



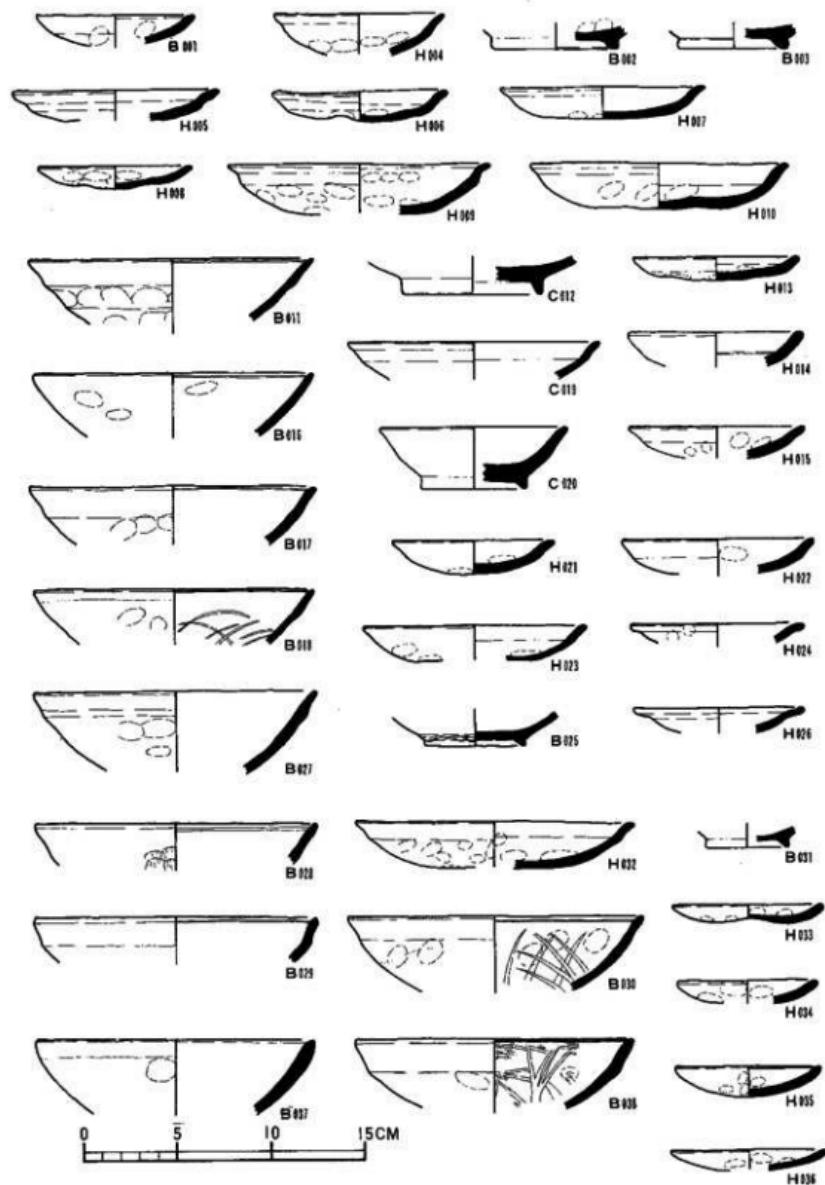
S B 2 (上), S B 7 (下)平面实测图



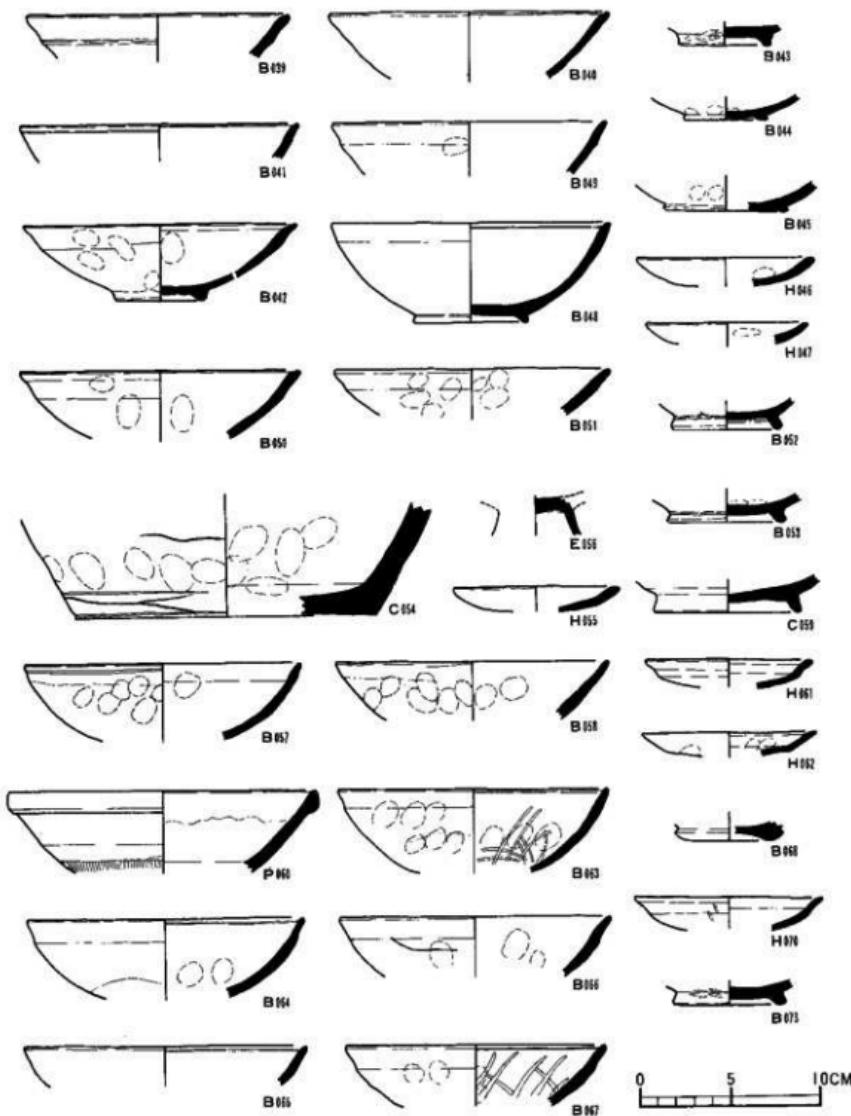
S B 6 (上), S B 8 (下)平面实测图



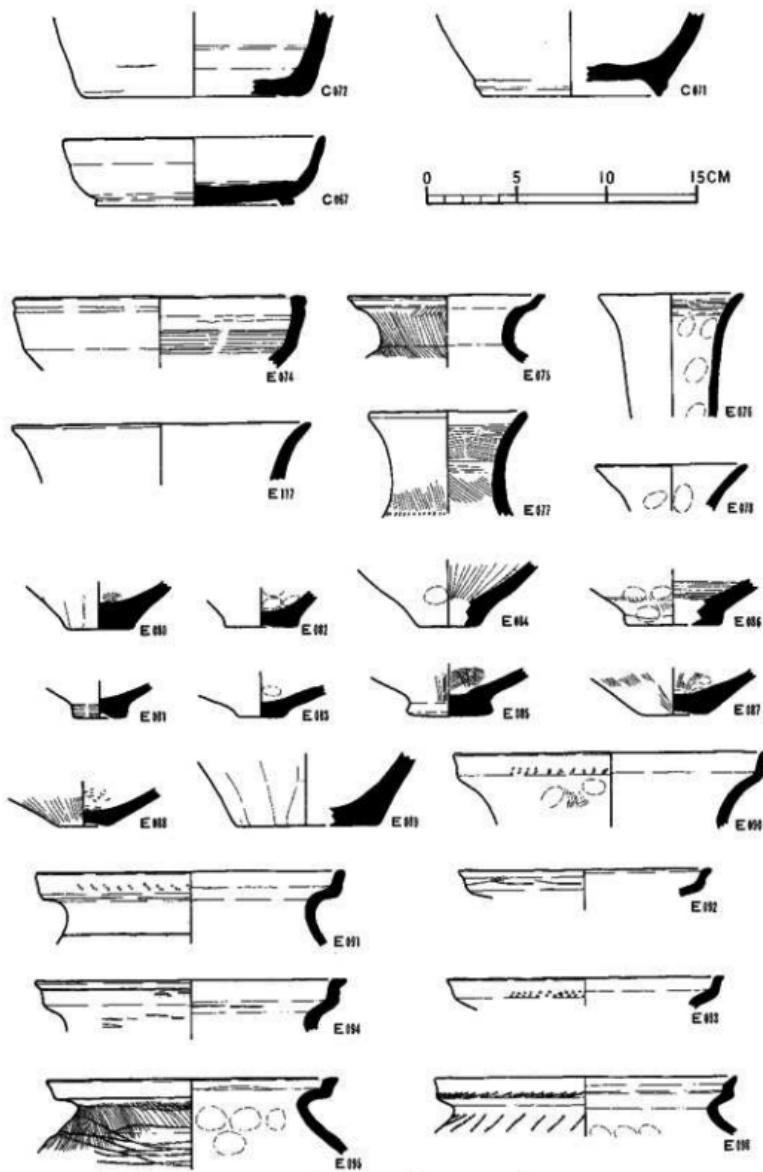
SB 5 (上), SB 9 (下)平面实测图



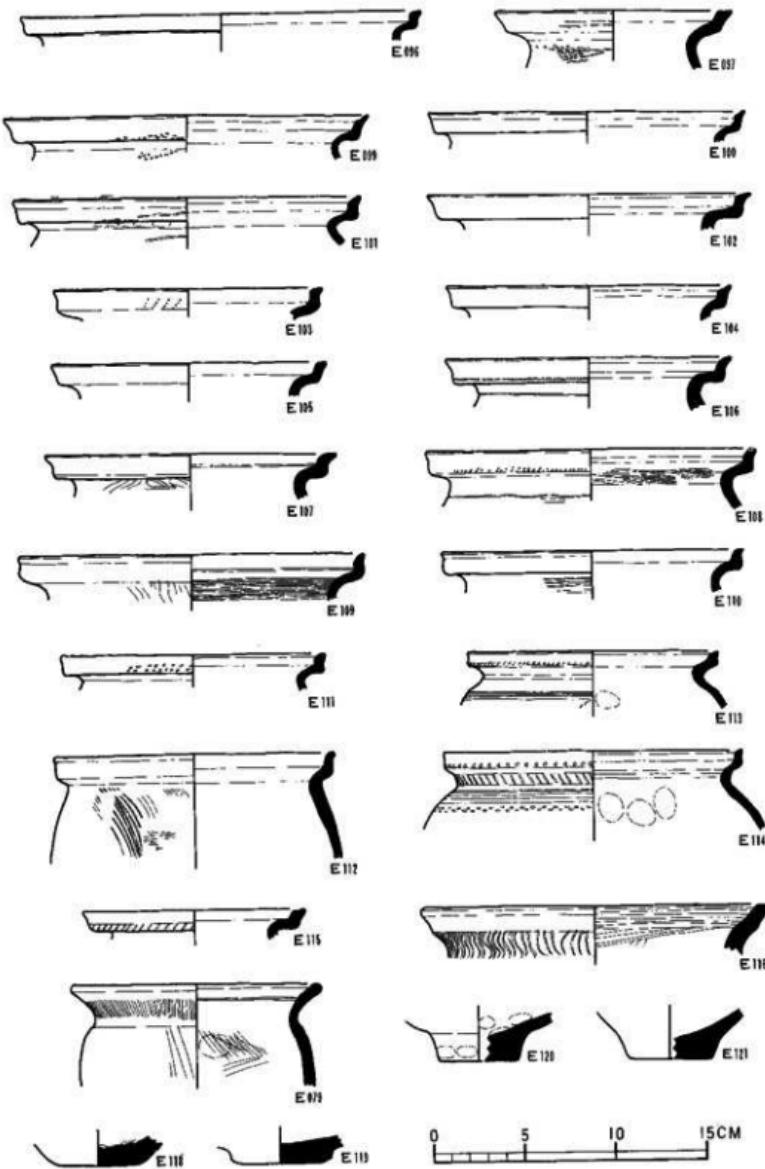
出土遺物実測図(H01~B03)



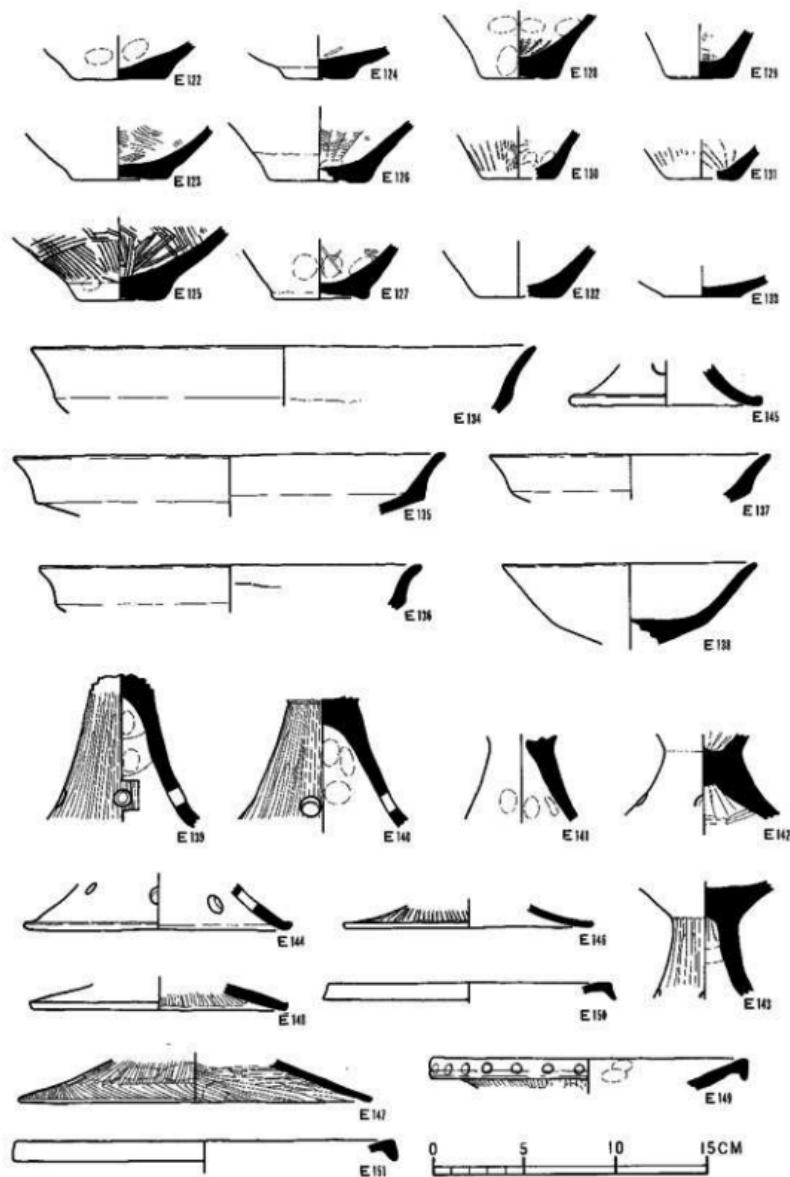
出土遺物実測図 (B039~B073)



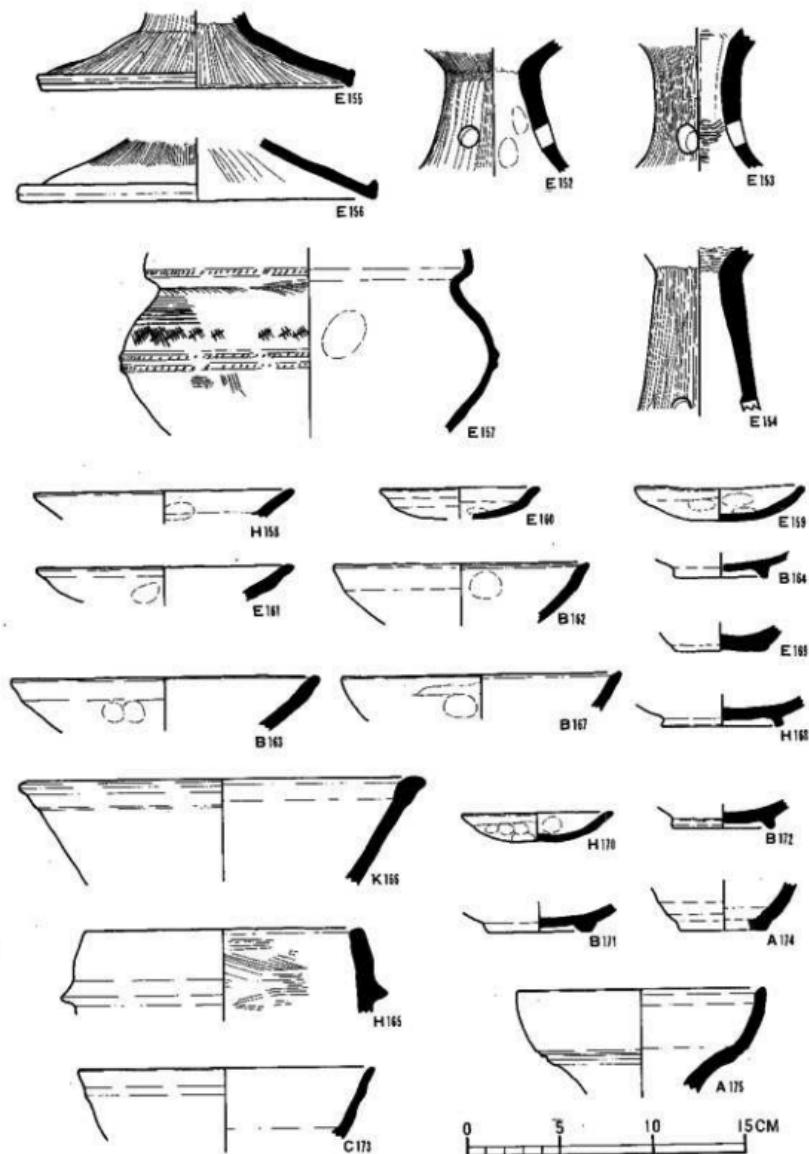
出土遺物実測図(E074~E098)



出土遺物実測図 (E096~E116)



出土遺物実測図(E122~E151)



出土遺物実測図(E152~A175)

湖南中部流域下水道管理用道路
関連遺跡発掘調査報告書 I
—横江遺跡・大門遺跡—

1978・3

編集 滋賀県教育委員会
発行 滋賀県教育委員会
(財)滋賀県文化財保護協会
印刷 株式会社 中村太吉舎